
AbilityGame

マグマ フレイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A b i l i t y G a m e

【Nコード】

N 5 9 0 4 U

【作者名】

マグマ フレーム

【あらすじ】

神の世界……で起きるバトルとギャグの物語でお気軽ファンタジー。

No. 000..ありがとうの言葉の代わりに

薄暗い寝室、明かりはたった一つのランプシェード。ベッドの上で座る少女と、ベッドに潜り込んでいる子供がいた。

「それはそれは昔々の物語。この世界以外の世界には八百万ヤオヨロズな
んて目じゃないほど神々が存在した時代。

神々は権力を象徴する為、そして強大な力を手にする為に信仰を
求めたの。信仰の力により私たちが使う魔力に似た力、神力シンリョクを手
にし、神技シンギを使った」

「なんでかみさまはけんりよくがほしかったの？」
幼い子供はそう聞いた。

「権力よりも信仰で集まる神力が目的よ。ご飯を食べないでも
神力さえあれば生きれるし、場合によっては永遠の命になる。そ
れを求めている神様は多いかな？」

他にも大勢の人達を加護で護ったり、強力な武器や防具、世界を
創ったりするために。シオン、貴女も私の血を受け継ぐ一人の女
神だからこれからの話はちゃんと聞いてほしいの」

「わたっか」
ちよつと間違っているが幼き少女は了解した。

「神力……その力を手にする為、多くの神々が求めて神同士で争
いは始まってしまふの。時が流れるうちに神々の怒り、悲しみ、
苦しみ、怨み、多くの負の感情は一つの精霊に近い生き物として生
まれ落ちた……。自分勝手な考えのせいね」

「生きてるの？」
「ええ、私たちのご先祖様も同じように生まれた神々よ？ 例え
ば多くの人がある森を好きになると素霊って呼ばれる魔力の塊の人

が生まれるの。

世界の一部そのものとなれば精霊になり、信仰されて神になる。

ご先祖様がどんな神様だったかは別の昔話だからまた今度ね？」

「――よくわかんなかった」

「いずれ分かるわ、じゃあ話を続けるわね？　多くの神々はその生き物に対抗した。だけどその多くの神々より何倍、何乗の数の感情により生まれた怪物に勝てるはずも無く命を絶たず恐怖、そして絶望を埋め込んだ」

「誰も倒せないの？」

「それがね？　そんな怪物に勝利したのは太陽が月に隠れる現象……日食の如き瞳を持ったと言われる名も無き神だった。

神々は勝利に喜んだ、その神に多くの呼び名を与え、多くの神々がその神に仕えたの」

「かみさまのおうさま？」

「それぞれの世界で神様に王様がいるから真・神王と呼ばれてたらしいわ」

「しんしんおう？」

「うん、じゃあ寝ましようね？　おやすみシオン」

木造の廃校。一般的に腐り落ちた材木がそこらに落ちていたり、雑草が生い茂り、カラスが鳴いていたりというイメージがあるだろうが、ここは違った。

かなり古くなっているが、一部分も壊れていない。雑草は確かに生えているがほとんどは芝生だ、綺麗に整えれば美しいグラウンドになるだろう。本当に廃校になったのは残念なくらい良い場所だ。

砂場、ジャングルジム、滑り台、鉄棒……様々な物がある。　だ

が子供達は一カ所に集まっていた。少年ばかりの集団に一人、少女がいるのだが彼女は泣いていた。

「くすん……」

白い髪の毛に紅い右目と蒼い左目の幼い少女だ。彼女の服は白いワンピースだがビショビショに濡れて泥で汚れている。

予測からすると少年達にイジメを受けているとわかるが、彼女はやり返せることは無い。

彼女を囲んでいる少年達に比べると頭一つ分小さく、松葉杖を持っている所から足が弱いのだろう。

「スキルをつかえないかみななんてただのちびだ！」

そう言って少女に水の塊をどこから取り出し、彼女に投げ付けた。

「あう……！」

「ほらもういっこ！」

また水の塊を投げられる。

だがその水の塊は突然現れた誰かが木の棒で弾く。少女には当たらなかったが木の棒で防いでくれた誰かは濡れてしまった。

「ナニふせいでんだよ！」

「んったく……おんなのこはいじめるなってかあさんがいった」
黒目黒髪の少年だった。

「スキルつかえないやつがくちごたえすん」わらば!?!
いじめっ子の額にデコピンが決まる……が、5mほど遠くの砂場までぶっ飛んだ。

「ゴチャゴチャうつさい」

「こ、こいつ……おまえのシュゾクはなんだよ!!」

「かみ」

それが何なの？　そういった感じで黒髪の少年は答えた。

「お、おまえらいつせいこうげきだ!!」

リーダーらしき水を投げ付けたいじめっ子が叫ぶ。

水の塊、小さな炎、砂埃を運ぶ風、水滴る泥が次々と現れ、黒髪の少年に向かう。

「ココからここまでバリアーはった」

よく幼いが言うように木の棒で一本線を引く。だが彼の言葉は戯言ではなく、自動ドアの音を立ててガラスのような透明の壁が現れた。

全ての攻撃を防ぐ。しかし傷一つ無い強度で、泥がぶつかったにも関わらず泥は付着していなかった。少女は色んな意味で変な奴だと思った。

少年は突然走り出し、いじめっ子達5人の周りに円を引き、バイと呟くと彼らは消えた。

そして彼は少女に近付き、少女は目をつむった。少年はハンカチで彼女の涙を拭いてあげる。

「ぶにゃ？」

こてつと首を傾げる少女。　少年が手を差し出していた。

「オレ、りゅうしん。？」

「りゅう……？」

「うん、おまえのなまえは？」

「しをん」

少年が差し出した手を少女は握る。

少女と少年は日が暮れるまで二人仲良く遊んだ。

黄昏れの時間帯。 廃校の屋上で夜の帳と夕暮れを眺める。

「なあシオン、おまえのいえは？」

「ここのとおりだよ、りゅーは？」

「ココだよ。 きのう、ウチのとうさんとあさんがかいとったんだ。 もうリビングはかんせいしてるとおもう」

「りゅーのおうちになるんだ」

「っていかもうなってるんだよ」

「アレ？ ふほーしんにゅー？」

「シオンはともだちだからだいじょうぶ、もうかえるじかんでしょ？ おくってくよ？」

「うん」

夜の帳が空を覆い尽くし、美しい黄色い月が浮かぶ。 門前で二人は立ち止まった。

「ついた」

「ここがシオンのいえか。 じゃあまたあしただな」

「うん。 ーねえ……りゅー？」

「ん？」

彼女は少年に向かって一言。 ありがとうの言葉の代わりに、とある言葉を呟いた。 その言葉は少年にしか聞こえず、星空の夜に消えた。

No. 001..封神学園

それはそれは昔々の物語。

世界には八百万ヤオヨロズなんて目じゃないほど神々が存在した時代。神々は権力を象徴する為、そして強大な力を手にする為に信仰を求めた。

信仰の力により魔力に似たエネルギー、神力シンリョクを手にし、神技シンギを操った。

あくまでも現象を起こすならどの神秘的なエネルギーで再現できるが、神技にはたった雀の涙ほどでも、バケツ一杯の魔力に勝るほどだ。

その力を手にする為、多くの神々が求めて神同士で争いは始まる。時期に神々の怒り、悲しみ、苦しみ、怨み、多くの負の感情は一つの精霊に近い生き物として生まれ落ちた。

多くの神々はその生き物に対抗した。だがその多くの神々より何倍、何乗の数の感情により生まれた怪物に勝てるはずも無く命を絶たず恐怖、そして絶望を埋め込んだ。

そんな怪物に勝利したのは太陽が月に隠れる現象……日食の如き瞳を持ったと言われる名も無き神だった。

神々は勝利に喜んだ、その神に多くの呼び名を与え、多くの神々がその神に仕えた……その神は己の一族を白黒ビャクコクと呼んだ。

時は変わってとある人間世界『虹輝銀河』コウキギンガ、星の名は『漆碑』ナナヒ、舞台は『封神諸島』フウカと呼ばれる島々の集合体。

国ではないが日本に近く、学校の校庭では手から炎や氷を手から発生させた魔法陣から打ち出したり、空を飛んだり魔法の技術を持った国であることが分かる。

ある晴れた昼下がり、のどかな一日の後半に差し掛かる頃……だったが突然、ゲームで敵を切り裂く効果音がした。

その音がした場所では、周囲には一人の男子生徒が額を真っ赤にして吹っ飛んで行く。両手には真っ二つになった釘バットが握られていた。

どこからどう見てもただの木の棒を逆手に構える黒髪の少年が、つまらなそうに木の棒を空に投げる。すると武器はボロボロ崩れて消え去った。

「戦闘終了」

その少年は落ち着いた声でそっと呟いた。

「あ、あいつ……ただの木の棒で馬柅^{マケタ} 兼^{けん}さんの釘バットを断ち切りやがった！」

「嘘だろ……！？ どんな魔法を使いやがったんだ！？」

「――銀時計、返して貰うぞ？」

黒髪の少年が声を低くそう言った。

この状況になるまで少し時間を戻ろう。時は少々遡り、その日の朝であった。

春と言えば始まりの季節……つまり始業式、入学式といった行事である。この学園内の場所の名は『封神学園^{ふうしかがくえん}』、幼少中高大が全て保障されるマンモス学園と言ったところだろう。

普通の学校と違うのは中学が3年間ではなく5年間、昭和の初期と同じなのだ。小学校6〜12、中学12〜17、高校17〜20、大学20〜24と言うわけだ。

広さは小国を丸ごと一つ島を丸ごと学校にただけではなく、空には太陽の光を邪魔しないように空飛ぶ城……というか島だ。こ

うなると地下にもかなりの部屋があるのだろうか？　ここまで広い学校だと悪事をする者は多いだろう。

物置となった教室に、数人の男子生徒が集まっていた。手にはそれぞれ煙草やその箱、ライター、モザイクだらけの本などがあつた。

彼らはマジ学校だりいななど文句を言っていた。そこへ一人、黒髪（くろかみ）の少年が現れた。

「――ぬう……高等部の始業式の場所、わかんなくなった……。
なあお前ら、始業式の場所知らないか？」

どうやら彼は迷ったらしい。

「ここはお前がいる場所じゃない」

「いやだから道を聞いてんだけど？」

「聞こえなかったか？　ここはお前がいる場所じゃない」

「（こ、コイツ……べたな台詞を言ってカツコイイって思ってるのか……コイツ……できる！！）」

なにがだ……？

「ほう、どうしても帰らぬと言うのか？」

「いや始業式の場所に生きたいんだけど？」

「なら身に染みさせてや――！」

言葉を言い切る前に後ろから竹刀で頭部を叩かれ、彼は気絶した。竹刀を持つのは金髪ポニーテールの青年、彼は仁王立ちしていた。煙草を吸っている所からすると彼も不良といったところだろうか？

ギャーギャーと不良達が仲間をやられたことに腹を立てて怒鳴るが、金髪の青年はまるで聞こえていないように平然と黒髪の少年に少し近づき、腕を振るうと青年の後ろにいた不良達の前に半透明な

壁が現れた。

そして彼は少年に付いて来い、そういつてこの部屋を後にする。追い付こうと少年が走る中、不良達はパクパクと口を動かしているが、声が聞こえない事から防音にもなっているのだろう。

「勝つ気はあったかどうか知らないが、戦闘はよしてくれ。予備の机とか学校の備品は無料^{ただ}じゃない」

「別にする気はなかったんだけど？」

二人は歩きながらそう話す。話の最中、黒髪の少年は手に立^{ホロ}体映写を浮かべる。そこには彼が不良達に絡まれ、青年が現れるまでのシーンが記録してあった。

『――ぬう……高等部の始業式の場所、わかんなくなった……。』

なあお前ら、始業式の場所知らないか？』

『ここはお前がいる場所じゃない』

『いやだから道を聞いてんだけど？』

『聞こえなかったか？ ここはお前がいる場所じゃない』

彼が迷っているシーンだ。

『ほう、どうしても帰らぬと言うのか？』

『いや始業式の場所に生きたいんだけど？』

『なら身に染みさせてや――！』

そこで映像は終わった。

「完全に無視かよ……！？」

青年は呆れながら突っ込む。

「なあ、何でわざわざあそこに来たんだ？」

「先生がお前だけ入学式の待ち合わせ場所に来てないから同じクラスって事で連れて来いと言っていたからだ」

「そういうことか、ってか同じクラスなんだ……」

「そういうことだ。ところで名前は？ 写真だけしか覚えてなくてな。俺はココア、カカオ 華香 ココア 恋焦愛だ」

名前は漢字そのものに意味を込めすぎて、まるで当て字の組み合わせになってしまっている。

「ビャクコク 白黒 りゅうしん 龍神、みんなにはシンカリユウって呼ばれてる。好きな物はチヨコレート」

「――俺の名前でわざわざ好きな物言わんでも……。 なあ 龍神、りゅうしん リユウって呼んで良いか？」

「良いよ。それより、始業式までの時間は？」

「時間は……まだ大丈夫だな、だが早い方が良いだろう。ちよっと早めに歩くぞ」

ココアの速度が上がり、シンもそれに付いて行く。

「そこはうっかりと『しまった間に合わない!!』をするべきだろう？ そして女の子にぶつかって……」

「どこのラブストーリーだ！」

「え？ 女の子が突き飛ばされた衝撃で骨が折れてピアノの大会に出れなくなるんじゃないの!？」

「悲劇すぎるだろ!？」

「そして彼女はお前を恨み、数年後に背後から……」

「どこのサスペンスドラマだ!! それに俺はルールに従う性格だからな、髪の毛を染める事が禁止なら本来の焦げ茶色の髪だ」

良く見れば生え際に茶髪が見える。

「――チヨコバナナみたいだ」

「髪の毛については何も言わんでくれ……」

「自分から言ってたのに」

「チヨコバナナみたいだというなって事だ……」

禁句だったようだ。

「ってか煙草吸ってんじゃない？」

「コレはココア●ガレットだ」

「お菓子かよ」

どうやらお菓子のようだ。話からすると飲食類の持ち込みはOKらしい。

数分後に二人は会場へ時間内で到着した。始業式は保護者の方が祝福の言葉、一部の担任の先生を紹介するといった物だ。

なぜ一部の担任の先生なのか、その理由はA～Zまでのクラスが存在している。とんでもなく多いが、そういう理由で学園内の様々な部屋を使うので一部なのだ。

しかし学園長兼校長先生は忍者の如く分身の魔法で同時に始業式を始めているらしい。学校の先生の数も足りないのですその人がやるときは少なくない。

一学年24クラスに一クラス約50の生徒、ハッキリ言ってとんでもない数だ。全生徒の名前を覚えられる人は少ないだろう。

龍神とココアはX組である。クラスはランダムで選ばれ、勝手に他のクラスに移ることもできる。

数にバラツキができる筈だが魔法でもかかっているのか大体揃った、運良く少ないクラスに転入生が来たりする。

入学式が終わり帰宅時間、帰りの支度をする者達や、そんな事は無視して残っている生徒たち。

帰らないのは一部だが、大半の生徒たちは帰りの支度をしてとっと帰ってしまう。ココアは煙草を吸いながら……いや、ココアシ●レットを吸いながら帰る支度をしている。

シンは小学生低学年に見える少女と共に教室へ入って来た。近くにいた人が何で教室に戻ってきたんだ？ と聞くとシオンが忘れ物したんだってと答えた。シンは待ってる間、ココアが鞆に物を入れていた最中に銀時計を落としたのを見た。

「……？ ココア、コレ落としたぞ？」

シンは銀時計を拾い上げるとき、何か銀時計の重さにおかしい感じはしたがすぐさま教室の出入り口に向かうココアに駆け寄り渡す。

「あ……すまん、ありがとな。 かなり大事な物なんだ……」

「大事な物？」

「幼い頃、家が宗教関係で異端……それだけで殺されかけたんだ。その時、俺を助けてくれた人が落として行ったもので、いつか返したいんだ」

少し懐かしくも悲しそうな顔をココアがする。

「なるほど、ネタバレ風に言うとは最終話辺りで実はその恩人が四天王の一人か、ラスボスで現れると言うベタなパターンなんだな？」

「んなわきゃねえだろ！？ それに恩人は女の子だ」

どんなRPGゲームだ！！ と突っ込むココアにニヤハハハとシンが笑う。 そんなシンの所に小学生低学年ほどの女の子が来た。

「りゅー、みかった」

彼女が下敷きを見せて言う。 それには黒髪ツインテール、だが前髪の左側は白い毛と茶色の毛の束があり、三毛猫をイメージしているのだろう。 下の方に『魔女っ子ひとみん☆』と書いてある。 だがそれよりも下敷きを持っている少女も特徴的だ。 アルビノなのか白い髪にはアホ毛がぴよこんと飛び出し、紅い右目に蒼い左目をしている。

「あ、シオン」

「――式の時もあったが、どう見ても小学生低学年……いや、下手すりゃちよつと身長の高い幼稚園児だろ……？　それなのに俺らと同じ年って……」

そう、ココアが呟いたように小学生低学年に見える少女も高等部……つまり高校生なのである。

「種族の問題じゃね？　異世界はいくらでもあるんだし」

シンが言うのは世界にいくつもの人間の種類がある。主にこの『虹輝銀河』では日本人に似た種族が多い。

理由は特に宗教を気にしない人が多いからこそ無宗教の人が集まる世界なのだ。

「うゝむ……そういう種族か……？　まあいい、所でえっと……」

お前には名前言ってなかったな。俺は華香カカオ 恋焦愛ココア、よろしくな」

「うん、よろしく。 “しをん” だよ」

シオンはニコツと笑う。あまりにも無邪気な笑みは女性……いや、自分勝手なわがままな少女でもドキツとするほどの物だった。

「――！　あ、ああ」

「――ねえココアちゃん、あえるといいね？」

「ああ……俺はあの子に会って絶対に返すんだ」

シンとシオンにそういうも、心の中では自分に言い聞かせているのだろう。　X組の隅で誰かの口元が不気味に笑みを浮かべる。

No. 002..アイツは俺の友達だ

廊下に倒れ伏すココア。額には血が噴き出し、唇を横断する。彼は悔しさのあまり歯軋りをした。頬にツーツと涙が流れ、拳を握り絞める。そこへシンが通り掛かる。

「ココア……何があったんだ？」

「奪われた……アレを奪われた……」

ココアの手には銀時計に付いていたチェーンが握られている。

「――俺、取り戻してくる」

シンの手にはジグソーパズルを一面9枚で創られたキューブが現れる。大きさは2cm程。ジグソーパズルは漆黒の地で淵は蒼い蛍光色のラインが発光している。

「奴ら容赦無いぞ……俺の左足、奴らに折られた」

「大丈夫、俺は奴らより強いから」

シンはニヤハア♪と笑い、軽くココアの額を、ペチッと叩く。
その白黒ビャクコク龍神りゅうしんの笑顔にココアは啞然とするのであった。

シンはキョロキョロ周りを見渡し、確認を終えたのかキューブを握り絞める。キューブがシンの周囲にいくつも現れるとピースがバラけ、神社などにある鳥居がパズルのピースによって造られた。

「テレポードア【移転扉】」

鳥居の向こうは此処とは違った廊下が見える。シンは鳥居に入っていくのだった。

場所は変わってココアが倒れていた廊下から5階ほど上の階。車輪の無いスケボーで移動する3人組がケラケラ笑いながら銀時計

をキャッチボール代わりに投げ合う。

だが、段々と速度が落ちていき、彼らは訳がわからないといった表情をしながらボードを降りた。

「な……魔力吸収か!?!」
マジックドレイン

両手を見ながら一人が呆然と言った。

一人が周りを見渡して「誰だ!!」と叫んだ。するとパズルピースで創られた鳥居が目の前に現れた。一枚一枚は漆黒の地で淵は蒼い蛍光色のラインが発光する。

そこからシンが車輪の無いスケボーに乗っていた3人に顔を向ける。瞳は虚ろであるが瞳孔が開いている。

「お前らあ……ココアの銀時計、――返せ!!」

シンが言い放った一言に3人は後退りをする。

「や、やる気か!?!」

「な、何なんだよお前!!」

「な、なめんな!!」

それぞれ警戒しながら右手親指の指輪、ピアス、首輪、それぞれに手をかける。

それが強く輝き、右手に釘バット（バットも鉄製）、両手に金鎚、洗濯物を干す竿にナイフを括り付けた物、簡単に薙鉞が右手に現れる。
ナギナタ

「低級『ULCA』か」

「て、てめえなんてこんぐらいで十分だ!」

「そ、そうだ!!」

金鎚と薙鉞の2人が武器を構えて襲い掛かってくる。シンはニヤッと笑みを浮かべる。

シンが戦っている廊下とは別の場所。

ぴよこぴよこと白いアンテナが跳ねる。アンテナではない、それは髪の毛……つまりアンテナはアホ毛だった。

アホ毛を生やす白い髪を持ち、紅い右目に蒼い左目をしているのは日月 飴媛^{しをん}以外には居ないだろう。

彼女は両脇に松葉杖をカッチャ♪ カッチャ♪ と鳴らしながら廊下を歩く。シオルダーバッグには先ほどの下敷きがチラリと見える。

彼女が廊下を進んでいるとココアがいた。彼は廊下で包帯を額に巻き付けてるが、包帯にジワアッと血が染み渡り朱く染まる。

「ココアちゃん？」

「ん？ シオンか、どうしたんだ？」

「りゅーりゅーさがしてたの」

「アイツはヤバイ奴らん所に向かった。アイツを追いかけないと……!!」

ココアはそう言いながら目の前にある救急箱に手を置くと強く光り、収まると十字架の指輪に変わっていた。

「りゅーりゅーならだいじょーぶだよ」

「大丈夫って……」

「りゅーにかったことあるひとなんてぼくはしらないもん」
純粹でキラキラした左右非対象の瞳で訴えかける。
オッドアイ

「そうは言われようが……痛っ!!」
折れた足が軋む。

「ケガ……してるの……?」

そういつてココアの足にそっと触れた。その触れた手は優しい

光を放つ。

「骨がこんなに高速で治るだど……！？　かなりの上級者か！？」
そういつてシオンに顔を向ける。　だが、目の前にいるシオンは……。

「ケホッ！　ケホッケホッ！！　かはあ！？　かはーはー……！
こひゅーこひゅー……！」
咳を繰り返し、喘息に変わった。　口からは血が流れ出す。　胸を押さえ、それから左足も押さえた。

「な……何が起こってるんだ……！？　（足を押さえている……
もしや俺の怪我を代わりに請け負ったのか！？）」
驚きながらも直ぐさまシオンを担ぎ上げる。

シンが戦闘をする廊下。

金鎚を両手に持った男が走る。　右手に持つ金鎚が右から左へ振るわれ、シンの顔面と腹に襲い掛かろうと向かう。　が、男の二の腕にシンの拳がヒットした。

二の腕にある筋肉同士の間、そして金鎚が追加されている遠心力を殴られ、あまりの痛みに両手の金鎚を放って痛みに泣き叫ぶ。
大きな怪我は無い、ただ拳の形に痣が付いただけである。

「う、うあああああ！！！！　腕があああああ！！！！」

「金鎚の遠心力に頼りすぎ、相手に当たらなきゃ振り回してるから隙が大きい。　それに俺がもっと力を入れてれば折れてたぞ。
振り回してるだけじゃ見切られるし、場合によっては仲間を殴る場合もある。　それでもって……右の金鎚しか使っていないんじゃない方金鎚にする必要はない」

シンは淡々と相手の欠点を指摘する。　だがそこに薙鉈ナギナタを構えた

男が現れ、右上から左下へ斜めに斬りかかる。

しかしシンはナイフよりも前に向かって走り、相手の物干竿を奪い取って放り投げた。

「薙鉈ナギナタは棒術のセンスも必要になる。さっきの奴と同じ、ただ武器を振り回して戦うのは素人だ。

学校の授業をやってるならコレぐらいできて当たり前だ」

「んだと！！ そんな事しねえでも俺らは強え——ゲブシッ!？」
顔面にシンの足が決まり、くつきりと靴の跡が付いた。

「てめえ！！ よくも二人をやりやがったな！！」

リーダーらしき釘を刺した金属バットを持っている男が叫び、バットを斜め下に構えて襲い掛かってくる。

「や、やっちまってください馬柎マケタ 兼さんけん！！」

「そんな奴一撃で終わらして下さい！！」
あっさりとやられた二人はリーダーこと馬柎マケタ 兼けんを応援する。

「てめえなんて一撃で終わらせてやる！！ 『ダークネス・ギャラクティック・ライジング・スーパー・スペシャル・スパニッシュ・ウル——』」

技名を叫んでいた馬柎マケタ 兼けんは額を真っ赤にして吹っ飛んで行く。

両手には真っ二つになった釘バットが握られていた。

馬柎マケタ 兼けんが技名を唱えていた時、釘刺し鉄バットは黒い電気を纏い出していた。

どこからどう見てもただの木の棒を逆手に構えるシンが、つまらなそうに木の棒を空に投げる。すると武器はボロボロ崩れて消え去った。

「戦闘終了」

「あ、あいつ……ただの木の棒でさんの釘バットを断ち切りやがった！」

「嘘だろ……！？　どんな魔法を使いやがったんだ！？」

「――銀時計、返して貰うぞ？」

シンが声を低くそう言った。

「こ、これなら返す！！　何の為にこんな銀時計に執着すんだよ……！！」

「アイツは俺の友達だ。　アイツがどんな顔してるか……わかるか？」

「し、知らねえよ！」

「アイツは……幼い時に助けてくれた人が落としたソレを、返したくて大事にした。　それをお前らに奪われ、悔しくて泣いてた。足を折られ、傷だらけで、額に肉って書いてある」

場所は変わって保健室。

「ぶにゃあ？」

目覚めるシオン、起きるときの謎の鳴き声は無視しておこう。

「だ、大丈夫かシオン！！」

「ぶにゃ」

ココアの慌てた問いにシオンは頷く。　まだ顔色は悪い。　そして謎の鳴き声は無視しよう。

「所でシオン、お前……俺の怪我を請け負ったのか？」

「ほえ？」

「俺は足が折れていた。　お前の手が俺の足に触れた途端に俺の足は治り、代わりにお前が怪我をした」

「ふえ？」

「あゝもういいや……（――駄目だコイツ……何も覚えてねえ！）」

「むう？ それよりココアちゃん、あたまのハウタイまっかだよ？」

「ん？ ああ、外すか」

包帯が外されるとシオンがクスクスと笑い出す。 何事かと鏡を見ると……。

「ナンダコリヤアアアアアアアアアアア！……！！？」
保健室で声が響く。 無論ココアは怒られるのが当たり前であった。

数分後が過ぎ、シンが保健室に入って来る。

「よおココア、……にシオン！」

「んったく、てめえはなに人ん顔ひとに悪戯してんだ！」

「水で落ちる奴にしたから良いだろ？ 人によっては油製でやる！」

「ひでえ！！ おっと、それよりリュウ……実は……俺の右足をシオンが魔法で治してくれたんだが……」

そういつてベッドで俯せになり、眉毛に黒く塗ったバンソウコウで「ゴマちゃん！！」とか、顔色が悪いにも関わらずに海老反りになってゴマファザラシの物真似しているシオンの右足を見る。

足にはギブスがあり、何とも痛々しい感じた。 ついでに物真似の事は全く重要ではない。

「シオンの能力でたぶん『替わってあげたい』って思ったからだと思う。 さてと、もう帰ろうシオン」

「うん、――あ、りゅーりゅーエネルギーほきゅー！！ はむ！！」

シオンはシンの口に3秒程くっつけた。ココアはあわあわしている。

「――って俺は何を慌ててんだよ!? いくら同級生がディープききき……キスしてるからって見た目どう見てもこいつら中学生と小学生低学年ぐらいだろ!？」

あれ? そう思ってみたら一瞬で頭が冴えた……。っとそれよりもあいつら……俺の銀時計を奪った奴らはどうなった!？」
正氣に戻ったようだ。

「『天地神明省』^{てんちしんめいしょう}が偶然いたから連れてかれた」

「天地神明省!？」 全ての政府や、宗教に命令を下せる存在でありながら、どの組織の味方でも無く、この世界をここまで発展させた人達……

組織内にいる殆どは正義の味方って物が嫌いって噂らしいんだが……ついでにトップの大半は不老不死って噂だ」

「不老不死の事はどうでもよくね? あ、コレ」

そう言って銀時計を渡し、シオンを背負った。

「あ……ありがとな」

「どういたしまして! じゃあなココア!」

「ココアちゃんバイバイ」

「じゃあな」

そういつて二人は保健室を出た。

「面白い奴だ」

そういつて立ち上がるとコツンと爪先に何かが当たる……シオンのギブスだ。

(アイツ忘れてるうーうー!!?)

心の中で叫ぶのであった。

だがココアはツツコミで気付かなかった、シオンの足と、顔色が
シンとのキスで治っていた事に……。

No. 003：花見と不良

学校の廊下には『4-X』と言う教室、そこはシン達の教室だ。
新しい仲間が多いとの事で自己紹介をしている。

「俺の名前は白黒^{ビャクコク} 龍神^{りゅうしん}、好きな寿司ネタはチョコレートパフェ
！！」

「普通そこは好きな食べ物から入るだろ！？　そしてそれは寿司
ネタじゃねえ！！」

ボケをするシンに黒髪の少女は突っ込んだ。　彼女の瞳は紅い右
目と蒼い左目、シオンと同じ眼をしている。

「ナイス突っ込み！」

「ジャカマシイ！！　ほれシオン、お前の番だ」

「はい、ぼくはひづき　しをん。　だいすきなのはりゅりゅー
！！」

そういつてシンに抱き着くシオン、それに答えて抱きしめるシン。
かなりのバカップルであるがシンとシオンは誰が見てもお似合い
のカップル過ぎて何も言えないだろう。

「ば、バカップル……」

「それより今度はお前の番だけど？」
シンが席に座りながら少女に言った。

「ああ、俺は日月^{ヒツキ} 理雄兔^{りおと}。　好きな物は緑茶と座布団」

「特技は体育座り？」

「ただ俺は悲しい奴なんだよ！？」
呆れながら席に座る彼女。

「そういえばリオ」

「何だよシン？」

「俺、お前の名前始めて聞いた……リオで名前だと思ってた!!」

「俺とお前は約13年の付き合いだろ!？」

「大丈夫かリオ？」

「お前が大丈夫かよ!! それよりお前のせいで俺はダメかもしれない……」

リオ机に突っ伏すのだった。

場面は変わって始めての授業。眼鏡をかけ、赤と黒のチェックのワイシャツを着た若い先生である。

「さて、この世界で住む者は誰でも『MasterAlllicense』^{メイル}通称『MAL』と呼ばれる物を持つてる。

この蒼い蛍光色の刺青^{タトゥー}が手の何処かにあるだろう?」

先生は手の平を見せる。そこには先生が言っていた蒼い蛍光色の刺青^{タトゥー}があった。

それぞれ生徒は自分の手にある刺青^{タトゥー}を見る。どちらかの手、手の平か手の甲だ。

「コレをこの世界の政府……『天地神明総合政府』^{てんちしんめいそうしやうせいふ}の創立者の一人^{ルーン}が作り出した術式。

一度刻まれば全ての証明書になり、身の危険になる物を感知すると自動的に鎧が展開され、そしてこの世界の電化製品……神器製品を使う為にもこれが必要だ」

そういつて先生はクラスに設置されているTVに手を向けるとTVのスイッチがONになる。

「こういった神器製品は神秘《Unknown》、荷重《Load》、変換《Convert》、機器《Automatic》……通称『ULCA』と呼ばれ、『MAL』のランクが高くないと使えない物もある。

そうそう、『MAL』も『ULCA』も魔法などを消し去る神秘破壊能力とかでは消すことは不可能だから安心していい。他にも『MAL』には機能があるがそれはまた今度だ」

その日晴れた昼下がり、花びら舞い散る桜道。

空は青空、雲一つ無く、黒髪乙女はお茶を飲む。

紅い右眼と蒼い左眼に舞い散る桜を映し出す。

柔^{やわ}い香^{かほ}りが鼻をくすぐり、3色団子を引き立てる。

此処は封神学園^{ふうしかくえん}のお花見で1番美しい隠れスポット、人が少ない所か彼女しか居ないのはやはり隠れスポットだからだろう。

畳を模した敷物に礼儀正しく正座をする少女。身長は165cmかそこらだろう。目を瞑り、団子を串から歯で引き剥がす姿は可憐だと誰かは言った。

茶飲み茶碗に手を伸ばし、3回で丁度角度が180度回して一服。「——ふう……」と目を瞑りながら低い一声を零す。

そんな和やかな時間を彼女は過ごす……が、ソレを壊す輩が居た。

「俺達とお茶しない？」

男がこの和やかな雰囲気仲間6人を引き連れて壊した。

声をかけた男はツンツンとした金髪にグラサン、ガラの悪い蛾のピアス、黒いランニングシャツには紫の線で描かれた口に出してはいけ無い危険生命体『G』。

ハッキリ言ったださい。それよりも邪魔をされた事が腹に立ったのか、少女のコメカミに血管が浮き出た。

「なあ、そこで一人寂しくしてんじゃなくてよお」

「――……」

すくつと少女が立ち上がる。

「お、一緒に」「行くわけ無いだろカス!!!!」

とてもハスキーな声で少女は細くも筋肉が程よく付いた……と言うか細く綺麗な豪腕から強烈な拳を突き出す。その拳によって吹っ飛ぶ男。

「オカーサアアアアアアーン!!」

「部屋谷^{へやだに}さああん!!!!」

額に“己”と描かれたスキンヘッド。

「てめっ!!」

まるでチアガールのボンボンのようなアフロ頭。

「コノ女^{アマ}!! ツペ」

唾を地面に吐き出す長髪の男……凄いキモロンゲ。

「俺達の兄貴を!!」

リーゼント……別名ヘチマ頭。

「先輩を!!」

熱帯魚の背鰭^{せびれ}のようなモヒカン。

「みんな、やっちゃまうぞ!! 俺は逃げるけど」
既に逃げ腰のパンチパーマ。

彼ら不良達は拳を振り上げて殴りかかってくる。

「一人一人喋るってドコの劇団だ!」
そして彼女はロングの後ろに立ち、そいつの髪を掴んで木にぶつける。

「ぐああ!!」

よわすぎ
「余話杉!!」

「甘いぞ?」

彼女はいつの間にかモヒカンの後ろに立って言う。モヒカンが驚く寸前では首に手刀を入れられ、気絶する。

あらかせぎ
「荒枷木!」

「余所見してんじゃねえ!!」

彼女は額当てを凹ませる程の思い切りの頭突きをして。

「うがあ!!」

あまりの力で吹っ飛ばされ、気絶するスキンヘッド。額当ては凹んで“己”が“乙”になってしまった。

びはっ
「日初!」

「まだ戦闘中だあ!!」

彼はリーゼントに足払いをかけ、腹にボディীবローを入れる。

「ガアッ!!」

「オイオイ、コレでおしまいかな?」

彼女はつまらなそうに言う。

「狩鞭^{ガリベン}！！　　っち、ウヲオオオ！！」

殴りにかかっていくアフロ。

「隙がありすぎだ！！」

彼女は拳一つで捻じ伏せる。長い黒髪が揺れる。

「アフロお！！」

は一步、また一步とゆっくり歩く。パンチパーマは怯えて後ろに下がるが、気絶していたロンゲにこけてとうとう逃げ道を無くす。

数分後、ぞろっと七人が正座で少女に説教されていた。

「――まったく一人相手に何人係で来てやられてんだよ？　そんで突っ込んで良いか？　まずお前らの苗字『ヘヤダニ』『よわすぎ』

『あらかせぎ』どんな苗字だよ……！！？

スキンヘッドの奴は髪の毛が無いのに『びはつ』だろ。　リーゼントで全然勉強しない感じなのに『ガリベン』って……。

そして『アフロ』、お前だけ心配されて叫ばれた時に何でお前苗字は言われてなかったな、お前の苗字は？」

「小西田です」

「普通う！？　――最後にパンチパーマ、お前最初に仲間置いて帰ろうとしてただろ」

「ちょ、ちょっとコンビニで中華まんを作りに行こうと……」

「いやわけわかんねえからな！？　それよりお前の苗字は……？」

「ザビエルです」

「苗字がザビエルう！？　外国人か！？　ってか頭もミスマッチだろ！？」

本来のザビエルは実際パンチパーマでも河童のような髪型でもな

い。

それから数分間、彼らに説教をし、邪魔だから帰らせた後にまた喉かな時間を過ごそうと座った。その時だ、彼女は後ろから妙な気配を感じ、直ぐに木の枝に掴まった。

燃え盛る炎が一直線に通り過ぎ、桜の木を一本……墨の塊に変える。振り返れば一人の男性。黒いスーツにサングラス、両腕には眼の模様をしたリストバンドを着けていた。

少女は舌打ちをすると左手の蒼い光を放つ刺青……『MAL』が強く光り輝き、左手を振るう。

少女と男性の周囲には透明度のある蒼いガラスが現れた。

「――！ 1秒が6秒になっている、空間孤立能力を使えるのか……！？」

男性は左手のリストバンドの隣にある時計を見ながら言った。

「能力じゃない、これはこの世界独特の文化だ。つまりお前は外界者……しかも下見をせずにこの世界で戦うとは呆れたもんだな。

『MAL』には結界って機能があつてな、どんな場所でもフィールドになり、戦闘をしても周りに迷惑をかけない、更に戦闘終了まで続くっていう代物だ」

そういつて彼女は腰のチェーンに付いた爪の形をしたアクセサリに触れた。

爪の形をしたアクセサリはアサルトライフルに変わる。緊迫する空気が始まった……。が、どこから飛んできたカジキマグロが男の背中を貫いた。

「ガハッ！！」

「か……カジキマグロお!？」

思わず彼女は突っ込んだ。　　というか突っ込まずにいられないだろう。　　男が倒れて数秒するとカジキマグロがすうっと消えた。

男はボフンと煙を立てて消え去り、代わりに人形が落ちていた。
変わり身の術ってやつであろう。

少女はマグロが飛んできた方向を見るとシンがいた。

「おいシン……、助けてくれたのは良い。　　ああ、そこはいいんだけどよ……。　　なんでマグロなんだよ!？」

「投げやすいから」

「マグロじゃないほうが投げやすいだろ!？」

「大根とか？」

「何で大根!？　　砕け散るだろ!!」

「相変わらずリオは突っ込みしか生きがいが無いな」

「俺の存在って何!？」

「多分紙コップじゃね？」

「使い捨てってか!？」

シンの襟首を掴んでグラングランと揺らす。

「検尿用」

「しかも最悪な答えしやがった!!」

スカートの内側に隠していたハリセンを巨大化させ、シンを思い切りぶん殴る。　　頭を摩るそぶりもせずニヤハハと笑いながらこの場所から離れる。

「そういえばリオの家の戸棚に入ってた団子、キサラの作った一
今年の団子だから」

キサラとは人の名前であろう。　　その言葉を聞いたリオはピシッと石化する。　　シンが去って元のこうして、ヒツキ日月　りわと理雄兎はまたゆ

つくりと春を楽しむ――

「――ふぐう!! は、腹が……腹がああああ!!」

ことはできないようだ。

No. 004..イタズラ

世界、それはとんでもないほどの数が存在する。最も代表的な物が死の世界、天国、地獄、それらに行く前に辿り着く三途の川。魔法が存在する世界、超能力が存在する世界、幽霊などが存在する世界、モンスターや魔王などRPGのような世界。

それらが隣接する事で生まれたグループを次元と呼んだ。そしてそのグループは一般的に最も強い神、最高神の支配下に置かれる。そのグループを更に纏めた物を大次元と呼ぶ。

まあ簡単に言うと本だ。世界は一枚一枚がページと考え、それらを纏め上げた物、それが次元と言う本だ。つまり大次元とは本の集合体、図書館のような物であろう。

では世界の中にある物や人は何だろうか？ ページの欠片、^{ページ}そう言っ^{ページ}ていいだろう。

――だが世界で一番大切な欠片……^{ページ}世界源^{セカイゲン}と呼ばれる物が存在する。

それを操れば世界を操れ、それが壊れると世界が壊れる。つまり世界そのものである。簡単には見つけることは不可能で辿り着く鍵^{キー}も無い。

無論それを守る守護者や罨^{アミ}はいるが時にとんでもない強さの危険人物、または集団がそれを打ち破る事を恐れて『天地神明総合政府』が管理している。

主に現代の神々がよく手を外す事がある。分かったかシオン？
とリオが本を片手に椅子に脚を組んで説明する。関係はないが
スカートの中は影になって見えない。

「zzz」

しかしシオンは眠っていた。

「ぬをおい!？」

リオは手刀でシオンの頭にツツコミを入れる。

「ぷにゃあああ!？」

驚いて悲鳴をあげながら頭を抑えるシオン。そしてアホ毛がリオの手をひっ叩いた。

「痛っ!？ てめえのアホ毛はどんな髪の毛だ!! それは良いとして寝るな!!」

リオの手は鋭利な刃物で切り裂いたように裂け、ツウっと血が流れる。

「むうゝだってむずかしいもん」

「俺たち神は様々な権力をしようする権利を手に入れるができるが、あくまでも権利を手に入れる事ができるだけ。」

セカイゲン 世界源の関連は主に免許とかは勉強の試験が条件だ。俺は小等部に入る前に取ってるが、お前も必要になるだろ？」

「むにゅう……それよりまだぼくは神技しんぎも使えないよ？」

「はあ……とんでもない事を忘れてた……庭に行こう」

リオはそういって本を置いた。

広い住宅地、30階はあるだろうマンションを中心に和式や洋風の屋敷、アパートなどがある。ここ全てが日月の敷地だ。

リオはシオンを肩車しながら庭に来た。リオの上でシオンは林檎をシヨリシヨリ食べている。

「さて、これから使うのは生命力を操る神にとってかなり簡単な神技。 って訳でシオン、林檎の芯を埋めてくれ」

リオは相変わらず男っぽい口調でシオンに言う。 シオンは食べ

終わった林檎の芯を地面の窪みに入れ、土を被せた。

リオが「生命よ……」と呟くと彼女の腕から青白い霧のような物が発生し、林檎が埋まる小さな山に霧が吸い込まれた。

地面から何かの芽が発芽し、みるみる成長して立派な一本の木になった。木には紅い林檎が熟して実り、甘い香りが漂う。

「こんな感じで自分の得意分野を探れば良い。今の俺がやったのは神力を生命力へ変換し、それによって林檎の種を一気に成長させる神技だ。シオンもやってみろ？」

そういつてリオが指を鳴らす、すると1L分のペットボトルが現れる。そのペットボトルに入っている小さな粒を地面に振り撒いた。

「うん、がんばれしよくぶつ!! にゃあ!!」

しかし何も起こらない。

「できないか……」

「にゃあ……」

誰もいない庭、ただリオとシオンの二人だけがそこにいる。そんな二人の近くに黒いピースが何処からか現れて扉ができる。

「よ!!」

と言ってシンが現れた。そんなシンにシオンは「りゅーりゅー!!」と喜びながら抱き着いた。

「どうしたシン？」

「シオンと遊びに来た」

「コイツは今、勉強してたんだが……まあ良いか、遊びに行つてこい」

「やったあ♪ 行ってきにゃーす!!」

「じゃあ行ってくらあ」

そういつてシンはシオンに松葉杖を持たせ、そして彼女を背負って日月家の敷地から出ていった。

シンはシオンを背中から下ろしてしばらく歩いていると、白い壁の門前、巨大な白い塀の壁を前に華香カカオ 恋焦愛ココアが立っていた。ギュっと拳を握り絞め、生唾を飲み込んでいる。

ココアの目の前には白い壁の扉にはステンドグラス。男子トイレのマークに天使の輪を浮かせ、尖がった尻尾がある人、その人は斜めにラインが引かれていた。その絵の縁は丸が8つ、それに線が引かれて八角型になり、全ての辺に二本の線が横断している。

「何この壁？」 「ぷにゃ」

シンはココアに気の抜ける声で話しかける。すると緊張が緩んだのかココアがずっこけた。

「リュウにシオンか……」

シンとシオンを確認してココアが呟く。

「このたてものってなーにー？」

「シオンは知らないのか？ いや、リュウの表情からもそのようなだ……。」 『天地神明総合政府』の騎士団……」

ココアは説明を始める。その間にシンの頭にピコン♪ と電球が浮かんだ。 シンの手の中で一瞬、小さく光が漏れた。

（そうだシオン、ココアの腰に金の銃弾のアクセサリーあるよね？ あれと“この偽物”交換してくれる？）

と、手にココアのアクセサリーに偽た金の銃弾にせを持ちながら、頭

の中で他の人には聞こえないように、テレパシーのようなものを使ってシンは話す。『MAL』が光っているので『MAL』にある力だろう。

(でも遠いよ?)

(ふっふっふ、そんな事は簡単だ。俺の作った『神器*じんぎ不可視マジックハンド』によってな!!)

(使い方は?)

(片手で使うんだけど。コレで挟んだ物と、逆の手で握ってる物が交換されるって言う自分でも何で作ったのかよくわかんないアイテムだ!!) って訳であのアクセサリにせーに偽たこの銃弾を交換な?)

(うん!!)

そしてシオンは行動を開始した。

「『忠誠騎士ロイヤルナイツ』の門と呼ばれ、政府に入る者にとって大切な出発点だ。年齢問わず力あれば入れる。物資の調達、犯罪者の確保、危険物の回収などを主な仕事とする……」

「zzzz」

しかし二人は難しいので眠っておいた。

「いや寝るなよ!?!」

「大丈夫、ちゃんと聞いてたから。多くの依頼をこなすために『忠誠騎士ロイヤルナイツ』に入りたいんだろ? んでもって助けてくれた奴に礼がいたいと」

「確かにそうだがそこまで言ってねえ!!」

ココアが突っ込みを入れる。その時にシオンによって銃弾が入れ替えられるが、見た目は同じなので気づかないだろう。

「でもさ、何で入りたいんだ?」

「――前に俺さあ、幼い頃に殺されかけたって言っただろ？」

「そういえば……って事は助けてくれた奴は政府の奴って事か？」

「ああ。彼女はきつとココにいる。俺は彼女に会うんだ」

「なるほど、そして抱きしめて鯖折りにしたいと」
サバお

「するか！　どんな状況だそれ！？」

「さあ？」

「オチは無いのかよ……！？」

「まあ試験頑張れよ？　健闘を祈る！」

「がんばってね」

そういつてシンはまたシオンを背負って歩き出した。　シオンの手には金色の弾丸が握られていた。

黒い雲が空一面に漂う世界。　金属板を木の床のように組み合わせた地面、街路樹の代わりに電線の無い電信柱のような物が生えている。

ある一カ所だけ円を描くように8本、その柱が立ててあり、円の中心に瞑想をする男が一人。　周囲に人の形をした紙や、藁人形を置く髪の毛が長く、両目の目尻には5つずつ水晶が埋まっている。

その男の近くにガーゼで左目を隠した男が近付いた。

「“対の目”を持つ者は見付けたか？　エイス 第八番？」

「第六番、我が式神で一人見付けた。　だが何か別の者に我の式神は消された」

そういつて人の形をした紙をガーゼの男に渡した。　紙は指より太い何かで空けられ、大きな穴が空いている。

「生臭！？ 何だこれは……？」

「さあな、だが映像を見ればわかる」

そういつて左手を出すとボーリング程の水晶玉が現れる。

暗い道を進む、太陽の下に不法投棄された鏡には一人の男が映っていた。黒いスーツにサングラス、両腕には眼の模様をしたリストバンドを着けている。

水晶の光景と目の前の鏡から、この水晶に映る光景を記録していた式神であろう。

「この時、蒼い太陽と紅の月を司る神の神力から探しだしたが発見する事ができた」

第八番エイスと呼ばれた男がそう言った時、不良と戦う少女がいた。容姿は紅い右目に蒼い左目、そして黒髪……リオである。

「とある世界に存在したと言われる蒼い太陽、紅い月……」
水晶の男が呟いた。

「偶然その目をしているだけとかは無いか？」
と第六番シズが聞くが、第八番エイスは首を横にふる。

「見た目だけではなく神秘の波長も近い、それだけじゃなく……瞳に模様が浮き上がる。我等より格上なる者達なら例え神であろうが引けはとらん」

第八番エイスが拳を握り締め、手の骨が軋む音がした。水晶には戦闘をするシーンが見える。

『能力じゃない、これはこの世界独特の文化だ。つまりお前は

外界者……しかも下見をせずにこの世界で戦うとは呆れたもんだな。
『MAL』には結界って機能があつてな、どんな場所でもフィールドになり、戦闘をしても周りに迷惑をかけない、更に戦闘終了まで続くっていう代物だ』

睨み合う時間、水晶の光景が突然、TVの砂嵐と同じになった。
そして数秒してから映像を記録していた男の胸の中心から二本の銀色に光る棒状の物が生えるのを映した。そして映像はプツンと消え、ただの水晶になった。

「第八番、何があつたんだ？」
エイス

「完全に分からね、ただ式神は何か金属で胸を貫かれて負けたんだろう」

「それはそうと第八番、軍は集まつたか？」
エイス

「式神が500程な」

「結構集まつてるじゃないか？」

「だが質は低い、簡単にやられるだろう。そちらはどうだ？」

「洗脳は上手くいって50人ぐらい、洗脳がかけられてるのを気付かれないようにするには手間がかかるから少ないな」

「量と質か……」

第八番は量、第六番は質、どちらも足りないのだ。
エイス

「ま、小生には関係は無いですがね」

二人とは違う声、いつの間にか第八番と第六番の間にシルクハットに片眼鏡、そしてタキシードが似合う男性だった。
モノクル

第八番と第六番は目を見開く、気配を感じない……その驚きが彼らを驚かせていた。
エイス

「「第三番……!?!」」
サード

二人は声を荒げて叫ぶ。

「小生はあなたたちが水晶を見ているときから一緒にいましたけどね？ それはそうと第八番^{エイス}？ 貴方の式神はマグロで貫かれたようですね？」

「^{マグロ}鮪……だと！？」

「通りで生臭いと思ったら……」

驚く第八番、第六番が微妙な顔をした。

「ええ、カジキマグロです。^{クチバシ}嘴が長く、心臓を貫かれて亡くなった人もいるらしいです。」

そして『MAL』と『ULCA』……そう呼ばれた物は小生が調べていますよ？ 『MAL』は身分証明書などの役割を持ち、戦闘の鎧、それから免許証の役割を果たします。

特に鎧は我々、特殊眼を使う者の効果が無いのが嘆かわしい。殆ど効果を削がれ、たいしたことない力になる。

メデューサと呼ばれる魔物の瞳を見ると一般的に石になるが、『MAL』があれば痺れる程度。バジリスクと呼ばれる蛇の瞳を見ると即死するはずが、『MAL』があればやはり痺れる程度だ。

『MAL』を違法改造している者なら少しは抵抗されるが、洗脳や石化の眼は効果があるとわかった」

第三番^{サード}がシルクハットをクルクルと回しながら言った。

「ならどうしろと言うのだ？」
第八番が聞いた。

「より深き闇に手伝ってもらえば良いだけの話しさ」
シルクハットをピタリと止め、笑みを浮かべて第三番^{サード}はそう答えた。

004-1…忠誠騎士《ロイヤルナイツ》の入団試験

白い壁の門前、巨大な白い塀の壁を前に華香カカオ 恋焦愛ココアは立っていた。緊張が走るのかギュッと拳を握り絞め、生唾を飲み込む。

白い壁の扉にはステンドグラス。男子トイレのマークに天使の輪を浮かせ、尖がった尻尾がある人、その人は斜めにラインが引かれていた。その絵の縁は丸が8つ、それに線が引かれて八角型になり、全ての辺に二本の線が横断している。

「何この壁？」 「ぷにゃ」

気の抜ける声がココアの後ろから聞こえて来て彼はずっとこけた。

「リュウにシオンか……」

白黒ビャクコク 龍神りゅうしんことシン、そして隣に日月ヒツギ 飴媛しをんがいたのだ。

「このたてものってなーにー？」

「シオンは知らないのか？ いや、リュウの表情からもそのようなだ……。」 『天地神明総合政府』の騎士団……。

『忠誠騎士』の門と呼ばれ、政府に入る者にとって大切な出発点だ。年齢問わず力あれば入れる。物資の調達、犯罪者の確保、危険物の回収などを主な仕事とする……。」

「zzzz」

しかし二人は眠っていた。

「いや寝るなよ!？」

「大丈夫、ちゃんと聞いてたから。多くの依頼をこなすために『忠誠騎士』に入りたいんだろ？ んでもって助けてくれた奴に礼がいたいと」

「確かにそうだがそこまで言ってねえ!!」

「でもさ、何で入りたいんだ？」

「――前に俺さあ、幼い頃に殺されかけたって言っただろ？」

「そういえば……って事は助けてくれた奴は政府の奴って事か？」

「ああ。彼女はきつとココにいる。俺は彼女に会うんだ」

「なるほど、そして抱きしめて鯖折^{サベお}りにしたいと」

「するか！　どんな状況だそれ！？」

「さあ？」

「オチは無いのかよ……！？」

リオ並の突っ込み力だ。

「まあ試験頑張れよ？　健闘を祈る！」

「がんばってね」

そういつてシンはシオンを背負って歩き出した。

「ああ、ありがとな。　そういえばお前達は何の為に此処に来たんだ？」

「散歩」「ドライブ」

「リュウは乗り物か……」

そんな言葉は聞こえたかどうか分からないが、扉を開いた。扉の向こうにはグラウンドで多くの試験に受けに来た者達がいた。
ロイヤルナイツ
忠誠騎士になろうとする者達だろう。

「おお！？　誰かと思ったらココアじゃねえか！！」

辺りを見渡していたココアの前にくすみのある薄い青緑色のボサボサ頭、耳を上から下に貫く棒状のピアスをした男がいた。

「お前は……！！　誰だかわからないんだが？」

一瞬会ったことがある気がしたが、思い出せない相手であった。

「うおいつ！！　レイルだ！　レイル・クランツェ、お前とは小

等部の2年で一緒だっただろ！ お前とは隣の席になっただろ？」

「そんな前の事、普通は覚えてらんねえよ……」

呆れるココア、そんな時に建物の扉が開く。 現れたのは20歳

頃の男、金髪、オールバック、白スーツ。

左耳に真珠のピアス、そしてお洒落な眼鏡、スーツの袖にあるカフスや腕時計、宝石の指輪は全て『ULCA』だろう。

「ホステス……？ 何でホステス……？」

ココアが見た感想を言う。

「ようこそ忠誠騎士^{ロイヤルナイト}へ、試験官の東雲草^{シノノメグサ} 龍^{タツ}という。この俺と我

が騎士団の名前を見たからってホストクラブと勘違いするなよ？

人数は……58人か。 試験は三科目だ。 筆記、能力、実技。

あゝそういえば面接があったな。 四科目が1番落第する可能性が高い（どういった落第かは秘密だけだな）じゃ、入れ」

そういつて彼は扉を開けて入り、58人がゾロゾロと付いて行く。

最初の試験である。

「さて、最初の試験は筆記。 だが不正を働かんようにペンはこちらで用意している。 制限時間は10分間、それぞれ席に座れ」

「な……」

啞然とするココア、周囲の人々も啞然としている。

「――ザワザワするな、ただぼろっぼろの床と“席がたったの40しかない”……それだけだろ？ 早くしないと席が取られるから気いつけるよ？」

そう、東雲草が言うように席はたった40しか無い。

受験者はぼろっぼろの床は関係ないだろとは思っていてもそんな事より席の事、一斉に走り出した。

ココアも走り出す……が、立ち止まってしまった。一部の人も同じく足を止めた者は少しだけだがいる。

（なんだ……この妙な胸騒ぎ、試験官は何て言った？ 『ただぼろっぼろの床と“席がたったの40しかない”』……もしや！？）
ココアの視線の先には周囲を押し退けて席へ着こうと走る受験生……だが手前の席が一気に8つ、床が碎けて19人の受験生が奈落のそこへ落ちていった。鼻でため息を吐く東雲草は床の穴をヒョイッと飛び越える。

「だから言っただろ？ ぼろっぼろの床ってな」

（――なるほど、相手が言ってる事をちゃんと聞けない奴は騎士団には要らない、またはそれでも推察できなければ足を引っ張ると……）

「なあココア、この8つの席の床は定員オーバーになると6つ一辺に壊れるように腐食の魔法をかけてるんだろう。連帯責任って奴か……」

「誰……あ、レールか（影薄いから忘れてた……ってかそんぐらい分かってるっての……）」

「ひ、ひでえ！ しかもレールだ！」

哀れなレールは距離が約2mの長さ穴を飛び越える。だがそれ以上進めないと言い出す者がいる。だがコレぐらいの距離を跳べ無ければもしもの時に対応できないだろう。

そんな場所を通る中、床が抜ける前に4人だけ先に奥へ向かった者がいた。

「さっきは大勢だったから床が抜けたんだろ？ 俺らは運が良い」

「あゝ、その隅が1番腐ってるから気を付」 「あああああ
あ……!？」 「だから言ったんだが？」

偉そうに自分達は運が良いと笑っていた男は東雲草の言葉の途中で行ってしまった……いや、逝ってしまった。

「さあ残ったのは……38人、ジャスト20人が文字通りに落ちたな。 席に着いたのは31人か、他の席が壊れてるとちゃんと調べたようだな。

やっと試験の時間が始まるんだが、後の奴らはずっと立ってるか？」

「――東雲草試験官、ちょっとよろしいですか？」
シノノメグサ

それは席に着くことができなかったココアである。

「ん？ 新しい席を用意して欲しいっていうのか？」

「いえ、“今、空いている席”を使ってなら試験を受けてよろしいですか？」

「――ああ、それでなら他に試験をしている奴と同じで受ける資格はある」

東雲草の言葉にココアは僅かに笑みを浮かべ、誰もいない席に向かった。

ココアの靴の音と共に軋む木の床の音が鳴り響く。 木の床が軋む音からミシミシひび割れる音へ変わる。

（『MAL』起動……）

ココアは心の中で呟く。 心の声に反応するように彼の右手の甲にある『MAL』が光りだし、それに呼応するようにココアが向かう席周辺の床も光る。

ココアの足の音はカツカツと硬い床を歩く音になっていた。 木の床の上には蒼い半透明なガラスのようなものが敷かれている。

「結界の応用か、しかも木の上に張っている……おっと時間だ、
今空いている席は使いなよ」
フィールド

その言葉に悔しそうにする者達、だが一人だけ手を顔の横辺りまで上げる青年。

「ええ、分かりました。ですがそれはまだ受けて良いと言うことですね？ それに空いている席は使いな……つまり他の方の席なら使ってよろしいと言うことですね？」

その青年は赤い左目に黒い右目にショートカットな銀髪だ。

（シオンとは違うオッドアイか……気障っぽくて嫌な感じだ、イケメン爆破しろ！！）

何となくココアは嫌悪感を覚えた。

「――ああ、許可しよう」

その瞬間、一人がオッドアイの青年の拳一つで脱落した。

後の奴らは座ってる奴らが試験を受けられなくなったら座れ、それ以外は認めない。 解答用紙と先ほど言ったここで使って良いペンは机の引き出しにある、試験開始だ」

それぞれが引き出しからパンフレットのような物と一緒にペンを出すと一斉に始まった。 だが一問しか書かれていなく、誰もがおかしいと考えるがそのまま始める。

・第一問

この世界、虹輝銀河にある文化で身分証明書の役割をする刺青を
コウキギンガ
タトゥー
何と呼ぶか答えなさい。

（コレでつつかえるアホがいるか！ 答えは支配する全ての証明

書、MasterAllLicense、通称『MAL』)

ココアがそれを書き込むと第二問が現れた。

(なるほど、そういう方法か。 たぶん間違っていようが字が下手でも現れる。 が、それはつまりその問題での答えは書き直せないって事があるだろう……)

ココアはそう予測した。

・第二問

他世界では電気を流すことで動く物を電化製品と呼ばれるが、この世界では神秘エネルギーを流すことで動く道具を何と呼ぶか？

(神器製品、神秘《Unknown》荷重《Load》変換《Convert》機器《Automatic》、通称『ULCA』と呼ばれる)

ココアには簡単過ぎるようだ。

だが突然、机に頭を打ち付ける音が聞こえた。 ココアの前の男が倒れたのだ。 カラカラとペンが転がり、近くの少女が拾い上げる。

「そうそう、そのペン。 常にエネルギーを消費する『ULCA』だ、それぐらいできなければ軍には要らない。 たかがこれだけで何人落ちるか？

んで、そのペンを拾ったお嬢さん、この席を使うといい」

そういつて倒れた受験者に東雲草が触れると受験者は消えた。

テレポートさせられたのだろう。

「席、頂っきい♪」

先ほどペンを拾った少女、金髪アシンメトリーと、とろんとした

眠そうな目が特徴の少女だ。受験者X C唯一の女性である。

(なるほどな、そうやって交代するのか)

・第三問

一番の問題の答えはどのような事ができる？

ライセンス フィールド オートバリア ホログラムマップ
(身分証明書、結界展開、自動防衛、立体映写地図、無生物と一部の生物ならしめることができる亜空間、電話、メール、TVなど……)

ココアには全て簡単だ、まるで日本人がひらがなを読むようにスラスラと解いていくのだった。

笛の音が聞こえ、全てが終了した。席に座っているのはたったの16人だけであった……。

「第一試験終了だ、お前たち16人以外は騎士には向かない奴らばかりだったか……。去年や一昨年は30人以上はいたが……」

(――カスしか残ってないって奴か?)
案外酷い事を考えてるココアであった。

「次は能力、一時間は休憩でもしててくれ」

そう言って手前の椅子に座り、机に16冊のパンフレットのよう
な答案用紙をパラパラ捲る……。

(――華香 カカオ ココア 恋焦愛……女みたいな名前だな……。全問正解、
回答意見は的確で住所などもはぐらかしてる訳じゃない。

しかし俺が思っちゃ難だが気障な青年……俺からすれば少年に
嫌悪感を抱いていたのはイケメン爆発しろって考えてたのか? ち
よっと怖えな……)

実際その通りで彼、試験官である東雲草も気障な事をしてたら嫌われていただろう。

「ん……？ ん………！？」

何か興味の出る場所でもあったのか唸り出すのだった。

004-2..お前は何者だ……？

（第四問からは一般常識、それぞれの宗教が持つ特徴などの様々な分野で、1ページ25問の6ページ。

150問の問題……履歴書にも問題は無い……はず。 全問正解してればいいんだけどな……まあなるようにはなるだろう？

次は能力の試験、俺の戦闘能力を見せる……つまり試験官にどのような能力や技術を持っているか見せ、そして能力をちゃんと使えるか……か？）

ココアは顎に指を当て考えていた。

「おーい、お前の番だ」

前からかかる声、目の前には穴の空いた箱。

「え？ あ、はい」

ココアは慌てて返事をして穴に手を入れて一枚の紙を取り出した。紙を開くと4番、そう書かれている。

（4番目に戦うのか……まあ相手に怪我をさせても“回復させる技術”があるから男だったら本気でやっても大丈夫だろ。

眠そうな女の子には治るからって怪我させたくはねえし）

どうやらココアはかなりのフェニミストらしい……やはり名前は女っぽくても男の性ってやつなのだろう。

（試合は2つ同時に行われ、1対1の戦い。 つまり4人が2組みになって戦うからかなり早い時間で俺の番が来るか……。）

素晴らしい者もいれば騎士には向いてないカスもいた。 そしてココアが見たことがある奴……ショートカットの銀髪に赤い左目に

黒い右目のオッドアイである気障な青年の戦いが始まる。

「では余話杉選手と瑠璃ベルン・アネッツ選手、用意はよろしいですね？　では開始！！」

試験官は東雲草シノメグサとは違うゴーグルの亀の子たわし頭の人、ココアは名前を聞いては居ない。

余話杉よわすぎと言う長髪の男が中2臭いけど美男子に向かって髪の毛を引っこ抜いて飛ばす。

「俺の能力は髪の毛を杭くいに変える能力！！　『MAL』も『ULCA』なんていらねえ！！」

「『ULCA』発動、『影盾』シャザールド」

余話杉よわすぎの攻撃は瑠璃ベルンと言う名の青年が出した『ULCA』の盾に吸い込まれ、塞がれてしまった。

「ば、馬鹿な！？」

「僕的能力を見せるまでも無いですね……ああ、女神アルリネーゼ……貴方様から頂きました力……存分に振るえなかった事をお許してください。

ではお返ししますよ？　気持ち悪い髪の毛。普通好きな子の髪の毛を持っているとその子と付き合えると言う都市伝説は聞きますが、僕はホモじゃない」

そう言って指を鳴らす。すると一気に杭はキモロン毛に返され、ロン毛の悲鳴が聞こえるのだった。

（キモロン毛はどう見ても雑魚だが、あのイケメン野郎はかなり強い……女神アルリネーゼは確か暗闇を司る女神。

『ULCA』はその女神の加護を受けれるように影の力を付与されてるのか……。　自らが使える神の力に近いほど加護をより受け

れる……)

観客席にいたココアには分かった、彼はかなり強いと。

「勝者は瑠璃ベルン・アネッツ、戦闘などの判断からキモロ……ごほん、余話杉選手は試験を降りるようお願いします」

(いくらなんでも負けた選手にキモロン毛って言いそうになるって……こいつクビだろ？　だがそれは置いて戦闘が下手すぎると落ちるのか……)

「勝者はレイル・克蘭ツェ、焦草^{あせくさ}選手の負けです」

(あ、隣はレイルだったのか……全然見てなかった……。　ってか相手の名前が『あせくさ』……汗臭？)

「おいココア、俺の戦いはどうよ？」

「悪いな、見てねえ」

「なんだとお！？　せっかく俺がデブ野郎を『怒りの碇』^{アンガーアンカー}でボコボコにしてやったのに！！

くう！！　俺の運命はそんな物なのか！？　(あ、でも焦草^{あいつ}、コ

コアのこと見て俺系シヨタっ子ハアハアとか言ってたから見なくて良かったか……)」

哀れなレイル・克蘭ツェの運命……だが彼が存在感無いおかげでココアは助かったのだ。

「次はレックリーツ・ア・レジスト選手^{カカオ}VS華香^{ココア}恋焦愛選手」
ココアの番になる。　相手は高い身長に細い目、ボサボサの髪の毛、筋肉は結構あるだろう青年。

「ほう、お前が俺の相手……か」

「デカ……」

「いや、お前が小さいんだろう？　俺は176cmだ」

「俺は一応157cmだ、そこまで小さい訳じゃない」

「――十分小さいぞ？」

「種族問題だ!!　　ったく、用意は？」

ココアの右手の甲にある『MAL』が輝き、一本の長いチェーンが現れる。　チェーンには沢山の銃弾の玉があり、それにココアは手を置く。

レックリーツの左手の甲にある『MAL』が輝き、ベルトにあるアクセサリー……丸みを帯びたH型のキーホルダーに手を置く。

「完了だ。　試験官、始めていい」

レックリーツの言葉に試験官は頷き、笛を鳴らした。

ココアの両手にはそれぞれ一つずつリボルバータイプの拳銃が握られ、レックリーツの右手には2m程の斧が握られている。

どちらもアクセサリーが変化したもの……『ULCA』だろう。

ココアは何も言わずに拳銃を6連射、それをレックリーツは斧を盾にして防ぐ……かなりの速さだ。

ところ替わって瑠璃ベルンと言う名のオッドアイの青年と影の薄い男ことレイルは上で試合を見ていた。

「ココアの奴……結構苦戦するな……」

レイルは言葉を漏らす。

「他の受験者を気に入っているのかい？」

「まあな、俺はココアとは小学校の時に友達だった……んだがあいつは俺を忘れてる!!」

「――哀れだね？」

「うるせえ!!」

「それはそうと僕は隣の戦いの女の子が気になるね？」

「女……？　　あ、受験者の中で唯一の女か」

レイルがココアとレックリーツが戦う隣の試合を見る。

召還士の男性が相手で、男性が次々と繰り出すモンスターを少女は弓矢を飛ばして一撃で倒していく。

男性は自分の周囲を巨大なモンスターで囲んでいるので少女が飛ばす弓矢では阻まれてしまい倒すことができない。

「レイル・克蘭ツェ、君はどう見える？」

「どう見てもあの子は『ULCA』その物の力を使ってない、相手の魔力がかなり少なくなるまでなるまで省エネ作戦だろうな」

「意外に理性はあるようだね？」

「は？」

「君の性格上からあの子が不利だと言い出すかと思ったらその作戦だっけ気付いてた事に意外だと思ったのさ」

「勝手に判断すんな！！　　つとまあそれよりあの子の表情をよく見りゃ省エネ作戦ってより……遊んでねえか？」

「どれどれ……？　　わぁお、君……本当に観察力良いね？」

少女の表情をよく見れば口元が笑ってる、楽しんで戦ってるように見える。

「観察が得意なのはココアを今まで観察してたからだ」

「つまり彼が好きだと？　　そういう趣味かい」

「ホモじゃねえよ……あいつはいつつも何か隠してる感じだ、何かは知らねけど……力を抑えてる感じもする」

「なるほどね……まあ大体は特殊眼とくしゅがんかな？」

一方ココアの戦闘。

（ジリ貧……って訳じゃないな、風の力で銃弾の威力を弱めてるが既にもう何百発も体には入ってる）

ココアは持っている拳銃を銃弾のアクセサリーに戻し、腰にある

まだ起動させていない『ULCA』の銃弾を起動させた。先ほどとは形の違う拳銃だ。

（カカオといったかアイツ……なるほど、——強い、多分この戦いは彼が負けても十分騎士になれる要素がある……それほどの戦闘能力を持っているな。

スピードと命中力、そして『ULCA』である拳銃に込める力も相当なエネルギーだ）

レックリーツはココアの戦闘能力に驚くも表情に出さない。

（しょうがない、そろそろあの技を使うか……？ 拳銃もこれだとかかなり強いし……）

そう考えるココア……。だが……。

「をooooooo！！！！！！！！！！」
けもの 獣の咆哮が聞こえ、ココアが振り向くと巨大な猪……イノシシ 体には何か
が突き刺さっている。

よく見れば鳥やスライム、ゴーレムなど様々なモンスターが埋まってウネウネとイソギンチャクの触手のように伸び縮みしている。

「な、何だ！？」

「隣で戦闘していた召喚士の召喚したモンスターが暴走したんだろう」

驚くココアにレックリーツが説明した。

ハーフライフ
「半生命！？」

ココアがモンスターをそう呼んだ。

「ハーフライフ？」

レックリーツはココアが言ったことに疑問を抱く。

「半生命ハーフライフってのは『天地神明総合政府』の創造主であり、『M A L』や『U L C A』を作った偉人がモンスターをそう呼んでいた。だから気にすることじゃないが……俺たちの戦いはどうするんだ試験官？」

ココアは試験官を呼んだ。

「君たち二人とエレナ選手は合格です……が、花誰選手は暴走はなたれしてしまったので騎士としては失格。

だがこれぐらい騎士ならば3人で止められるはずですよ？ お分かりますか？」

「つまり俺たち3人でやれてか……なあレックリーツ！！と眠ねそうな奴」

「エレナ・セレーナ・ヴェングリッドですう、さっき試験官さんが名前よんでたよお……あとエレナで良いよ？」

フワフワした喋り方だ。

「俺は略した方が良いだろう？」

「ならレックで。エレナ、お前は補助魔法使えるか？」

「速度や攻撃、防御などを上げるハープの『U L C A』を持っています……回復はまだ使えません……」

「丁度良い。レック、お前が攻撃、エレナが補助、俺も補助だが回復をする！！」

悪いな……初めて会ったばかりで命令何てされて……。こんな状況でも普通ならふざけるなって言いたいだろうけど……」

「——ああ、了解だ。それにお前は間違っていない。得意不得意は誰にでもあり、このモンスターは拳銃や弓では無理だろう？俺がここは戦わねば圧倒的に不利だ、そして仲間を選ぶなど哀れな事。騎士ならば仲間が誰であれ協力だ」

「ええ、その通りです！！」

「ありがとう……。『回復の銃弾』装填。」

回復魔法がかかった銃弾を装填してるから、レックが怪我を負ったらこれを打ち込む。さあ、戦闘開始だー！」

3人が暴走するモンスターの元へ走る。エレナはハーブを弾き始め、ココアは拳銃を構える。

3人が戦闘する中、この部屋に東雲草試験官が入ってきて第二試験官の隣に来る。

「律儀な奴だ……騎士って言うより軍人って感じだな」

「東雲草さん、どの子に言ってるの？」

第二試験官こと亀の子たわし頭がそう聞いた。

「ん？ ああ、その金髪ポニーテールの少年だ。唯一、第一試験を全問正解で答えやがった奴だ……」

「そういえば戦闘能力がこの中で一番高いレックリーツ・ア・レジストという受験者がいます」

「レジスト……？ まさか成人になる儀式で神殺しをしていたあのレジストの一族か……？」

「そうです、どんな攻撃だろうとダメージを半分以下に変える『個人技能』を持つ一族です。」

そんな彼の相手が華香 恋焦愛、二人はほぼ同じ戦闘能力だった。レジストの方は隙が多いので本気だと思えますが華香 恋焦愛は魔力を極力抑えていた。

あれはまだ本気じゃない、枷を掛けていると見えます。外れる寸前でモンスターの暴走が邪魔をしました」

「レジスト一族に本気を出さないで互角……。——華香 恋焦愛、お前は何者だ……？」

004-3..巨大魔物戦

掻き乱されるハープの音色、碎ける床、舞い散る砂埃、鳴り響く銃声、イソギンチャクのような触手を切り裂く斧、巨大な猪を相手に少女少女3人は挑む。

身体能力を上げて触手を切り裂いたレック、だが直ぐに次が来たことに反応できなかった。腹部を殴られ吹っ飛び、殴られた部分は嫌な色をしている。

「カカオ……！！回復を……！！」

「了解だ！！」『回復の弾』ヒールブレード」

ココアが打ち出した弾丸は注射器の形をしており、レックに突き刺さる。痛みが無いのか顔をしかめる事もせず、腹部の色がすうっと元に戻る。

「うをおおおおおお！！！！」

猪の顔を越える高さまで飛び上がるレック。斧には風の魔法が掛けられているのか砂埃が舞い散り、緑色の魔力が宿る。

「マジックブレード【魔力弾（風）】！！」

ココアが風の魔力でできた銃弾をレックの斧に打ち出す。

魔力弾が斧にぶつかりと斧が纏う風は巨大になる。風を切る音が激しくなり、レックは必殺技を放った。

「【巨獣殺しのカマイタチ】」

斧が猪の体と同じほどの刃を纏い、レックは唸り声を出しながら振り下ろす。真っ二つに切り裂いた。

魔力の塊だからか、フィギュアを真つ二つにしたように中身は黒紫の肉で殆ど空洞だ。空洞の中には召喚士が風の刃に斬られたにも関わらず無傷で立っている。着地をするレック。彼が着地した瞬間、疾風の如く誰かが隣を駆け抜ける。

虚ろな目をした召喚士は意識が無いのかただ立ち尽くし、その後ろにはココアが拳銃を構え、「チェックメイトだ召喚士^{サモナー}」と呟いた。だが突然、糸が切れたように召喚士は倒れる。ココアは直ぐに体を支え仰向けにすると異変に気付いた。

焦点の合っていない目、額には瞳のような模様が赤紫のうねうねと気味が悪い光を放ち、どうみても人形のようなだった。

「何だ……これ……」

啞然とするココア、東雲草^{シノノメグサ}がやって来てココアの持つ召喚士を見る。顎に手を当て、重々しく口を開いた。

「瞳の中に五芒星^{ペンタゴン}、そして血の涙……最近噂の犯罪組織『謎の瞳^{エニグマアイズ}』の紋章だ……」

顔が引き攣^つる東雲草^{シノノメグサ}、それだけ危険な物なのだろう。

「聞いたことがある……様々な世界で特殊眼^{スキルアイ}と呼ばれる眼を強奪や墓荒らし、持ち主その者をスカウトなどで集め、世界を一つ潰した組織だと……」

ココアは背筋が冷える気分で言う。

「支配能力が掛けられている、特殊眼の力だろう。『MAL』があるかぎりそうそうかけることはできないはずだが……【支配解除^{ハナタレ}】」

多分だが花誰^{ハナタレ}は『MAL』を違法改造したから操れたんだろう」
自業自得と言えるが他人に迷惑を掛けるのは困る物である。

「試験は……中止に……？」

ココアが恐る恐る試験官二人に聞いた。

『謎^{エニグマ}』

「――いいや、今回の事件でより優れた者が必要になる。
の瞳^{アイズ}』は支配をする能力も多くて危険だ、より仲間を集める」

「――俺達も参加できるのですか!？」

「そうだ、本当に必要だからな（俺じゃなくて“俺達”か、レジ
スト（レックリーツ）とヴェングリッド（エレナ）の二人はもう仲
間ってことか）」

ココアの事を不思議な奴だと東雲草は思った。

PPP、PPPと何か鳴り響く音が聞こえた。それに反応して
東雲草^{シノメグサ}が右手の親指を耳に当て、同時に小指を口元の前に置くポ
ズをする。これが『MAL』での電話なのだろう。

「はい、東雲草^{シノメグサ}です。――な!？ ハイ!! ハイ!! 了解
しました! いえ、こちらこそ洗脳された者を見抜く事ができず
すみません!

ハイ、わかりました。ありがとうございました」

上司だろうか? それにしてはかなり腰が低い。

「東雲草さん、何かあったのですか?」

亀の子タワシ頭が聞く。

「『天地神明総合政府』の上層部が見ていたらしい、花誰^{ハナタレ}を連れ
て本部に行け。No. 13総帥が待ってくださっているらしい:
…」

東雲草が冷や汗を流す。

「わ、わかりました!!」

そういつて亀の子タワシ頭の試験官は花誰^{ハナタレ}を背負い、試験場から出ていった。

「第三試験までまだ戦っていない受験者がいる。レジスト、ヴェングリッド、カカオの三人はゆっくり休むと良い。他に戦闘の終わった者達もな?」

東雲草がそう言い、ココア達は試験場を出た。

^{ロイヤルナイツ}忠誠騎士のグラウンド、木陰でココアはタバコのようなお菓子、ココアシガ[●]ツトを吸いながら空を眺めた。

雲がいくつか浮いている。風に流され少しずつ動いていくのはとてもものどかな雰囲気だ。ふと東雲草^{シノメグサ}が電話をしていた時を思い出す。

（『天地神明総合政府』のトップは『秘密乃騎士^{アルカナナイト}』と呼ばれ、0121の数字を持つ総帥が存在する……そのNo. 13は……死神、不死者の世界を駆け巡った男……。

つまり『謎の瞳^{エニグマアイズ}』に墓荒らしされて出土された特殊眼を使って召喚士は支配されていたって事か?）

心の中で予測する。

そんな事を考えているとあつと言う間に時間は過ぎ、第三試験の場所へ移ることになる。だが……。

『寒!!!!』

凍り付いた大地の上で凍てつく吹雪に耐える受験者全員が同時に思った事である。

「此処は異世界……『^{エターナル}永遠の氷河^{グレース}』と呼ばれる極寒の大地。」

『MAL』に魔力を流せば防寒効果が現れるわ。

第三試験を担当するのは私、雪崩^{なだれ}氷花^{ひょうか}よ。残った受験者はたったの13人ね……？ それにしても……ちょっと“暑い”わね……？」

全員がハア！？ となるが男性陣は直ぐに別の事に視線を向けた。

ただでさえワイシャツ一枚の雪崩試験官はボタンを一つ外し……男達は顔を熱くして凝視する。そしてもう一つのボタンが外れ、赤い布、それにより魅力的に見える谷間が現れ……。

『お……おおう……』

「なななな……」

期待をする男たち。そして真っ赤になった顔を両手で隠しながらも、中指と薬指の間から覗いてしまうココア。

「暑かったあ〜♪」

下着姿の試験官、その前には顔が真っ赤の男達。そして誰とも反応が違ったココアは頭から湯気が出ていた。

「アハハ……みんなあ、目が怖いよ……？」

エレナは下心が丸出しの男達に苦笑いする。

「ふふん、レディのあれで慌てるとは余程モテないようだね？」
気障な事を言っ勝ち誇る瑠璃ベルン。

「下らんな……」

完全に呆れて『MAL』を始動させるレック。

「さて、冗談は置いてそろそろ試験にしようかしら？」
涼しい顔をしてホイッスルを取り出す試験官、そして鳴り響く笛

の音がこの凍てつく世界に轟いた。

周囲には山があり、一つの山がバリバリと音を立てて崩れる。氷で造られた巨大な栗……氷柱の塊が山が崩れた中から現れた。

試験者達は啞然とする。何せ大きさは約10m程だ、デカイ……全員が同時に思った。

「う、うにい!？」

ココアが口を開いた。

「『アイシクルガーゴイル』よ? これを倒したら合格、強いけど一匹だけよ」

ニコニコと試験官はそう言いながら移転した。

「こ、コイツを倒せば合格って事だな!？」

受験者の一人がそう言った。

「な!?! それじゃ一人しか合格できねえじゃねえか!」

「なら俺が倒して合格してやるYO!?!」

「それは私が!」

「いや我輩があ!」

「アッシが!?!」

「拙者が!?!」

「小生が!?!」

次々と『ULCA』を発動させてアイシクルガーゴイルに挑む受験者達。

「俺”って言ってた奴ラッパーかよ!?! そんなで途中から一人称がおかしくなってる奴がいるぞ!?!」

ツッコミをするココア。そんなココアの肩にポンっと手が置か

れた。

「それより俺らはみんなで倒すぞ？」

それはレックだった。ココアを信頼しているその目で、ただ真っ直ぐココアを見つめる。

「レック……？ 倒した奴だけじゃないのか？ 俺は忠誠騎士に

ロイヤルナイツ

入りたい……でもお前達が落ちるのも嫌だ！！」

「そうですよおレックさん、皆さんはあ……」

ココアは二人の事も心配する。

「試験官は倒せば合格とは言っていない、受験者の一人が倒せば合格と言いだした。 たぶんあの男はまわし者……桜だろう……」

「それなら……！！」

「一緒に合格できますう！！」

「またあの戦い方か？」

「ああ、だが極力魔力は抑えよう。 まずは様子見だ」

「ならココアは俺の戦闘を見ていてくれ、あの攻撃なら避けれる」
そう言っレックは戦闘へ向かった。

アイシクルガーゴイルが通った山の一部は見事な崖になっており、ココアはその頂上でレックの戦いを見る。

レックが硬い氷の棘を斧で粉碎する。 砕けた氷が飛んで来たのをあの地味で存在価値が小さい男ことレイルが槍の『ULCA』で砕いた。

最後にクルクルと槍を回して地面に突き刺すといういかにもカッコイイのだが……レイルの癖に生意気だ。

ゴロゴロと転がるアイシクルガーゴイルはレックに狙いを付けた。

次々と襲い掛かる氷柱^{つらら}、レックが破壊した氷柱の跡が見え……跡から新たな氷柱^{つらら}が生える。

「――な……!?!」

レックは絶句した、簡単に破壊できても再生できる事に。高い所でアイシクルガーゴイルの観察をしているココアも同じ反応だった。

次々と襲い掛かる氷柱^{つらら}にレックは全て避けているが、体力は持つのだろうか？ レックの体力が削れ、氷柱の餌食になるのは時間の問題だ。

「レック!?!」

叫ぶココア、だが後ろからの気配に横に避けた。戦闘始めに「いや我輩があ!」と叫んでアイシクルガーゴイルに向かっていった男だ。

1mはある扇子^{せんす}を持ち、緑の光……風の魔力を宿している。

「我輩の攻撃を避けるとはな?」

「緑の魔力……風属性か……!?!」

「いかにも」

「それより何のつもりだ……!?!」

「貴様は強く、そしてあのモンスターを唯一破壊できる武器を持っている。だからこそ今此処で倒すのだ!?!」

「俺の持つてる武器!?!」

「しまった!?! フフフまあ良い、貴様を倒せば良い^よのだからな
!?!」

のしかかる殺気、かなりヤバイ……ココアは舌打ちをして一瞬で拳銃を構え弾丸を発射する。

（【麻痺弾・二連射】!?! 俺の全力……いけるか!?!）

二連射×二丁の魔力銃弾が男に向かう……が、逸れた。

「な！？ 逸れた……！？ 一一違う、曲がったのか！？」

「【エアレール空気軌条】、風で作られた軌条で物体の軌道を変える技だ。つまり……」

「一一がつ……！？ 銃弾……？」

ココアの背に銃弾が命中する。

「一一体が……痺れ……。まさ……か……俺の……銃弾か……？」

「起動を曲げ、貴様に向かうようにした。拳銃を使う貴様には天敵なる技だろう？ さあ、貴様は此処で終いだ！！」

男は不適な笑みをし、閉じた扇子を振り下ろした。

そして同時期。 レックの体力が尽き、アイシクルガーゴイルの氷柱が扇子同様に振り下ろされる。

004-4:セピア色の記憶

吹雪が荒れる中、血まみれの指で今はもう弾いていないハープを握り占め、レックとココアを何もできず、ただ見る事だけしかできないエレナがいた。

「レックさぁん……！！ ココアちゃん……！！」
叫ぶ彼女、流した涙が凍り付く。

「何で……何で私は……動けないのですの！！」
彼女の足は凍り付いていた。無理に動こうとしたのか皮膚が剥がれ血が滲む。

「お♪ 今のうちに倒せる奴がいるじゃんかYO！！ お前の弓、本気で俺には苦手だYO」
ラッパな受験者だ、そいつはマイクを握っていた。

「な……アイシクルガーゴイルに何故向かわないのですか……？」
「はぁ？ 行くわけ無いYO！！ 何せアイツは中心壊した奴い
ただけどYO、綺麗サッパリ回復したのをお前は見なかったのか
YO！！」

（もし私達3人が話していた時、見ていればレックさんは……いえ、ココアちゃんもあの男に襲われるはずは……）

「俺の『ULCA』は衝撃波♪ 音が具現化、武器になるYO♪
例えばバン！！ 例えばドン！！ イメージ通りの衝撃波♪」
ラッパの“バン”の言葉に銃弾が直撃したように見えない何か
が彼女の肩を貫いた。そして追い撃ちをかけるように“ドン”の
言葉で腹部にバスケット程の見えない何かが直撃した。

「さあ次は選択して良いYO？ “ズバ”か“ザク”のどっちかだYO♪ 時間は10分間だけだYO♪」

（殺される……！！ 助けて……誰か……！！ “私は良いから” レックさんとココアちゃんを……）

彼女はそう願い、眼を瞑る。

動けない体、振り下ろされる扇子、舞い散る雪、鉛色の大空、自分の荒い息、冷たい雪のシャキシャキする感触、スベスベした氷の表面、全てを一斉に意識した。

自分の目で見える全ての時間がゆっくりに見える……。 嗚呼、これが走馬灯現象ってやつか……と、ココアはしみじみとした。

――死にたくない――

何時からだろう俺が忠誠騎士になりたいと思ったのは……何気なく自らの心に問う。

ココアの脳裏にセピア色の光景。 頭部を撃ち抜かれ地面に伏せる男性、その男性に向かおうとした瞬間、首を斬られる女性。

『おとーさん……！！ おかーさん……！！』

駆け寄る幼き少女、まだ6、7歳だろう。 呼び掛けても揺らしても、彼女の母親も父親もどちらも声に反応は無かった。

『子供――るのか、だが異端――は全て消し去――べきだ！！』

老若男女問わず！！』

そう叫び大剣を振りかざし、少女に投げる。 少女の体から刃が飛び出した。

現実には場面は戻りココアは歯を食いしぼる。

――まだ、死ねない――

「――だ、死……ねな……い……」

少しずつ口から出る言葉。

――俺の夢はまだ――

「俺の……夢……は、ま……だ……」

自分自身に言い聞かせる。

――始まる前なんだ!!――

「そう……だ、まだ……始まる……前……なん……だ……!!」

ここで……くたばって……た・ま・る・かああああ!!」

脚をバネのようにしゃがみ込んだ形から、跳ねるように男の腹部に拳を叩き込んだ。

吹っ飛ぶ男は遠くの氷柱つららにぶつかり、氷柱が崩れ去った。

「はあ……はあ……」

脳裏には悲鳴を上げて倒れる男達。男達の近くには7、8歳の少女が左手で男達から青白い何かを引き抜く。

彼女は漆黒の長髪を風に靡なびかせ振り返えると、夜空の碧を思わせる瞳をしていた。

「俺を助けてくれた……あの人に……俺は礼を、そして“コレ”を返すんだ」

そう言っ て銀時計をココアは握り締めた。

別の場所、アイシクルガーゴイルの氷柱つららが下ろされるレック。

(すまない……ココア、エレナ……)

目を閉じ、諦めるレック。

だが……一向に氷柱つららは振りおろされない。レックは目を開けると瑠璃ベルンが目の前にいた。

「お前は……瑠璃ベルン・アネッツ……」

「ええ、さてコレを倒さなきゃ？ 【炎の鞭フレイムウィップ】！！」

瑠璃ベルンが手に持っていた鞭を連続で振るうとアイシクルガーゴイルの氷柱つららが全て切り落とされた。

だが、何度鞭がぶつかって壊れない所もあれば一撃で壊れる物もある。

「強い……」

「違います、これは属性の相性でありパワーはレックには劣りますよ？」

そう言ってバラバラと崩れ落ちるアイシクルガーゴイル。全てが消え去った、と思われるが周囲の氷柱が集まって再生を始めた。

だがレックはある事を見つけた、それは黒い塊を中心に氷柱つららが集まり、再生していることに。

「あれは人形核ゴーレムコア……！？ 古いにしえのゴーレム、通称は旧型のゴーレムと呼ばれるタイプだ。

文字を書き換える事で破壊されるゴーレムを改良した物。魔力の塊を中心に動き出すと言うシンプルであり大量生産が可能になっている。

——しかも、あの核コアに攻撃を当てなければ破壊は不可能。 本来

なら旧型ゴーレム破壊能力を持つ道具アイテムが多く出回り、廃止された人造モンスターだ。

だがあれは核コアが逃げ回り、攻撃を除けている。それだけじゃない、あれはかなりの硬さになっていると見える」

「どういうことですか？」

「瑠璃ベルン・アネッツ、お前が切り刻む時、硬さに斑ムラがなかったか？」

「ええ、確かにそれぞれ違いましたね」

「多分あれは攻撃された場所程高度が増す……そう見えるんだが？」

「証拠は？」

「俺の感だが、そういった物があると聞いたことがある。そしてアイシクルガーゴイルは全て均等な氷柱の長さを持っているにも関わらず、理由もなく高度の斑ムラがある理由は無いと思われる。

また俺の予測だが、本来あのアイシクルガーゴイルは一定の場所を攻撃されるのが嫌なのだろう。戦闘中、誰もが弱い場所……ダメージを負っている場所を中心に攻撃するだろう？」

「ええ、急所が見つからなければ傷口から攻めていく。それは基礎ですね」

「それを逆手にとってアイシクルガーゴイルは防御を上げていくらしい」

「それでは一撃で核コアと言う物を破壊するしか無いじゃないですか……!?!? 試験官は……これはどうやって倒すと言うのです!?!」

「俺に言うな」

「すみません。ですが近距離では氷柱が邪魔して攻撃できませんし、氷柱を破壊してもすぐ再生、素早くて小さく、そして氷の中にある核コアを打ち抜ける物が無ければ倒す事ができないのでは……?」

「(素早く、小さく、そして大ダメージを与えられる物……そうだ、アイツだ!!) 瑠璃ベルン、あれを唯一倒せる奴がいる!」

「――レックリーツ?」

「あれを倒せるのは多分ココアだけだ。だが確実に倒すには：
ココア以外の力が必要だ。協力してくれ」
希望の光りを宿したレックに瑠璃ベルンは哑然としながらも「わかりました」と言った。

所替わってエレナの状況、ラッパな男がニヤニヤとしながら口を開いた。

「時間切れだYO!! グッナイ♪ チェケラあ♪ ズ……」
「悪いな、拙者^{せつしゃ}は汝^{なんじ}のような見下げた輩^{やから}を見ると虫酸が走るので峰打ちだが、思い切り打ってしまった」
それは和服を着た男だ……こんな男はいただろうか？

「えっと侍さん^{サムライ}、ありがとうございます」
エレナは呆氣に取られるがすぐさま礼を言った。

「――流浪^{るろう}だ」
流浪はそう言って顎を右手で摩っている時にその右手の『ULC
A』が光って和服と刀が消えた。スポーツマンの格好だ。

「ち、ちくしょお!! 2体1とは卑怯だYO!!」
「身動きできない女の子を魮^{なぶ}ってたテメエには言われたくないだろ？」
堪忍袋の尾が切れたラッパーに対しどこからか声、そして鎖付きの槍が飛んできてラッパの顔スレスレを横切る。

「遅いぞレイル・クランツェ、拙者は待ち侘びた」
「あゝそうかい」

「ありがとうございますう、影の薄い方!!」
エレナの感謝の言葉はレイルにはとても冷たく染みた。

よろよと立ち上がろうとするココア、足元がおぼつかなくかなり体力が切れているのだろう。

「あ……」

ココアが呟きながら前のめりに倒れる……が。

「おつかれさん、だけでもう一仕事してもらえるか？」
目の前にはレイル、エレナ、レック、瑠璃ベルン、流浪の5人がいた。

「——エレナ、レック、瑠璃ベルン、あと誰だ……？」

「拙者は将棋しょうぎ 流浪るろう。 汝を気に入った、手を貸そう。 それに

奴は貴様だけしか倒せない事も分かっている」

「侍……（そういえばあの我輩とか言ってたやつも俺しか倒せないって言ってたな） まあいいや。 よろしくお願いするぞ流浪？」

「御意ごい」

「ちよ、オイオイそれよりも最初、華麗に俺をスルーしてエレナちゃんから始めたよな!？」

「あ、お前いたのか？ ねいる・くらんちえ？」

「存在感無し!？ 全然違え!! ってか俺が今、お前を支えているだけど!？ 俺って嫌われてんの!？ そこまで不細工!？」

「「「「ただちよつとそういうのが似合うと思ったから」だ」
です」ですよ？」だが？」

「全一致ありがとうございます……って全然ありがたくなえ!!
俺ってココア以外とはほとんど初対面だよな!？」

それなのに『似合うと思った』って理由だけで俺はやられキャラ決定ってどういうことだよ!？」

全力でツツコンだレイル。

「そうだココア君、回復してあげますよ?」

「ナルシストだがいい奴だな瑠璃ベルン」

「ふふふ、ナルシストは悪者扱いですか……?」

哀れなレイル・克蘭ツェに魂の救済は……きつとやって来ないだろう。

「作戦通り、行くぞ?」

ココアは金色の弾丸を握り締める。拳銃の『ULCA』でもとっておきといったところだろう。

「ああ、失敗は俺たちの運命を変える」

レイルは槍と、槍に着いた鎖を持つ。

「全力で俺達はココアの盾となろう」

レックが肩に斧を背負う。

「だが誰一人欠ける事無きように……だろう?」

流浪が左腰の刀に右手を置いた。

ロイヤルナイツ

「全員で忠誠騎士になる、その夢の為にですね」

瑠璃ベルンが鞭と盾を取り出す。

「私は皆さんの補助しかできませんが、がんばりますう!!」
ハープを持ってそう言った。

「さあ、行くぞ！！！！」

ココアが走り出し、そしてみんなもそれに着いて行った。

003-5..貴女が必要とする騎士に

極寒の世界でココア達は白い息を吐きながら走る。少し離れた場所でエレナが補助魔法のハープを弾いている。

アイシクルガーゴイルの氷柱がココアに振り下ろされる。それを流浪が刀で受け止める。

(硬い……!! レックの言う通り防御が増しているのだな?)
流浪はそう考えながらも力を込めて氷柱を斬り飛ばした。

「サンキュー!!」

「礼には及ばん。――がっ!？」

流浪の背にはナイフが突き刺さっていた。無論アイシクルガーゴイルが飛ばすわけが無い、他の受験者だ。

「それは俺の獲物だあ!!」

正気ではない受験者が手に持つナイフを握り締め、流浪に襲い掛かる。

「ちい!! ここは任せろ!!」

レイルが流浪を救う為に受験者へ向かった。

一方ココア達はアイシクルガーゴイルの前、まで来る。

「頼むぞベルン!!」

「ええ、(ちゃっかり略されてる) 【暑い鞭】!!」

バラバラになるアイシクルガーゴイル、塊が宙に舞う。

(核は何処だ!! 右? 左? 違う、全ての氷が向かうとし

ているのは……)

ココアは鉛色の空に目を向けた。真っ黒な塊に白い目があった。

「見付けた!! レック、俺を投げろ!!」

「了解だ!! 斧の背に捕まれ!! 三回転する!!」

斧の刃とは逆の方向、そこにココアは捕まり、レックは斧を振るう。一回転、二回転、そして三回転した時、ココアが手を離して人間ロケットのように吹っ飛んだ。

みるみる氷柱^{つらら}を生やしていくアイシクルガーゴイル、その横をココアは通り過ぎ……。

「ジ・エンド!!」

手に握る『ULCA』を発動させる。

構えるは八つの穴と中心に穴が空いたリボルバー

ではなく蓮根^{レンコン}であった。

『ニヤハハハハ！！ 見事に自分の“とっておき”と間違えたなココア？ お前の銃は俺が預かってる』

「ーりゆ……龍神^{りゅうしん}の奴ううううう！！」
ひゅうううううう……と情けなく落ちていくココア、落ちるのがゆっくりなのは『MAL』のお陰だろう。

『いつ奪ったかって？ お前と話してる時にシオンが不可視のマジックハンドで奪い取っただけだ！！ ついでに交換もそれでな？』

「シオンも共犯かよ！！！」

『あ、そうそう蓮根^{レンコン}、人に向けちゃ駄目だぞ？ モヤシが飛んで危険だから。 じゃ！！！』

プツンと録音が消えた時、レンコンから何かが大量に飛び出してアイシクルガーゴイルを攻撃する。

しかも威力がとんでもない、なんとかなりの硬度になっているはずの氷柱をいとも簡単にバラバラと崩していった。

そして核^{コア}を撃ち抜き、アイシクルガーゴイルは完全に消滅する。

「いや強すぎだろ！？ って、モヤシを弾丸にすんなあああああ
あ！！！」

ココアのツツコミは鉛色の空へ消えていった。

落ちた時に身体がボロボロになったが、それよりもボロボロなのは心だった。　なんだよ蓮根^{レンコン}って！！　とぶつくさ言い、よろよろしながら仲間の元へ来た。

レイル、レック、エレナ、瑠璃ベルン、流浪……全員がココアを待っていた。

「みんな……」

緊張が解けたのかジワっとココアの瞳から涙が零れ出す。

「緊張が解けたか」

軽く溜息を吐くレック。

「お帰り、ココアちゃん」

エレナが笑って言う。

「泣いてんじゃねえよ？」

と言いながら喜びの涙を流すレイル。

「よくわからずにもらい泣きしてる君が言うべきではないですよ……？」

瑠璃ベルンがアホに対して呆れた。

「――蓮根^{レンコン}が切り札だったのか？」

「違え！！　勝手にすり替えられたんだよ！！」
走りながらココアは即座に叫ぶ。

涙を拭き、息を整えてココアが集合した。

『よくやったなお前達、6人全員が合格だ。後は一番難しいだろう面接、お前達なら……まあ落ちはしないだろう』

何処からか声が聞こえる。キヨロキヨロと周囲を見渡すと商店街のシャッター（薔薇が描かれている）のような物があつた。

「何だこれ……？」

レイルが触れる。するとシャッターがゆっくり開いていった。

「『MAL』による移転魔法だ、使い手の深層心理によって様々な姿をする。この見た目から東雲草シノメグサだろう」

ココアが開くシャッターを見て言う。

ココアの予測はその通りだ、薔薇の花束を持っている東雲草シノメグサ。――だが……？

「「って薔薇の花束食ってるう！？」」

ココアとレイルが突っ込んだ。東雲草はまるでポテトチップスを食べるように薔薇から一枚一枚花びらを剥がして食べている。

「ローズチップだ、『天地神明総合政府』の購買部で売っている」

「てつきりお祝いの花束かと思いましたが……？　と言うかなんて物売ってるのですか、薔薇は鑑賞する物です」

瑠璃ベルンが何だか怒っている感じで東雲草に言う。

「美味しいもんは美味いんだ。それは置いて第四試験へ移る。と思わせてただ一つだから此処で聞こう？

正義って何だ？」

「――正……義……？」

ココアは考える。

「悪しき輩を廃除する者です」

瑠璃ベルンは神に仕える者として言った。

「悪い方を捕まえる人です」

「闇の力を持つ者を消し去る奴だ」

レイルが言った。

「支配から解く者だろう」

レックが言った。

「悪の根を全て摘み取る者だ」

流浪が言った。

「――俺は……わかりません、何が正義なのか……人によってそれは違うと思うんだ。正義だからって悪人を殺すのは……許すのもまた正義なんじゃないのか？」

悪人って言っても全員が本当に悪い訳じゃ無いだろ？」

ココアは下を向いて呟く。

「ココアは良いとして、全員アタリではあるがハズレでもある。

ココアは到達できそうで到達できていない。

この俺ですら正義が何か知らない。だからこそ半端な気持ちで正義と言う言葉を使うべからず。その言葉を『天地神明総合政府』は掲げる」

「正義ってよくわかんねえもんなのか……」

シンノメグサ

東雲草の言葉にレイルは相槌を打ち、東雲草は頷く。

「ようこそ政府へ新人諸君、ルーキー本来ならそれぞれが別の世界で新人となったグループに分けられるが、お前達は既にチームワークを持ルーキー

っている」

シャッターの向こうからそういった。 6人は着いて行く。

「そこで何処かのグループから一人、お前達6人のグループに配属されるだろう。 それとお前達のグループ、隊長は俺こと東雲草^{シノノメグサ}だ」

「アンタがあ？」

ココアは嫌そうに言った。

「例え嫌でももっとオブラートに包めよ!! ——さて気を取り直して後は『忠誠騎士^{ロイヤルナイツ}』に登録で終いだ。 お前達のもう一人の仲間を連れて来る」

そういつて東雲草はどこかへ歩いていった。 目の前には受付がある。

登録は簡単だった、受付嬢が取り出したクリップボードに『M A L』が描かれた手を乗せるだけ、それだけでお終いというだけである。

それが終わると受付の隣にある階段からドタドタと誰かが転げ落ちる音がする。 ココアは何だろうかと近付いてみる、だが……。

「ひゃうん!？」

ココアは巻き込まれて悲鳴を上げる。 そして壁まで二人で転がった。

「ゲボハッ!？」

壁にぶつかって肺の空気を全て吐き出したのは黒髪ボサボサの青年。 年。

「痛……てめえ誰だよ!!」

ココアが怒る。

「あ、すまん。俺は日照^{ニッショウ} 世流牙^{セルガ}、えっと東雲草^{シノノメグサ} 龍^{タツ}さんの指揮するグループか？」

「ええ、そして僕は瑠璃ベルン・アネッツ。アネッツがファミリーネーム、瑠璃ベルンが名前。暗闇を司る女神、アルリネーゼの教徒です」

「主に吸血鬼とか夢魔の概念を司るあの神か。俺は元、デュアレス教徒だが……まあこの間まで“バイトで”聖女神ヒュデウンにいた」

頭をガリガリ掻きながら世流牙^{セルガ}は言う。全員がハア！？と疑問を持った。何処にバイトで別の宗教に行く奴がいるのか？と。

「えっと日照^{ニッショウ}、どういうことだ？」

ココアがそれを聞いた。

「セルで良いよ、俺はある日、魔法がお伽話だと思われてた世界、『』から来た。そこから『鉦銀^{あらがね}河系』に来了。

魔獣って呼ばれるモンスターが人間を襲い、そこに手を刺し伸べてくれたのは『巨神デュアレス』

巨大ロボットだかゴーレムに乗り込んで戦う世界だった」

「スーパードット物か！？」

ココアがツツコむ、結構ちよっと目が輝いてたのでロボットとか好きらしい。

「そこで路頭に迷った俺はデュアレス教徒に入ったんだが……まあそれが、全てはその神だかが仕組んだ物で、今まで戦争を起こすのを楽しむ為にしたらしい」

「神なんていたのか？」

レイルが聞いた。

「いない、ただ不死の力を手にしただけの悪魔だった。約4500年の遊びは政府のトップ、たった一人にほぼ素手だけで終わりを告げた」

「や、約4500年の化け物をほぼって言ってますが素手で……!?」

セルの言葉に瑠璃ベルンは驚きを隠せない。いや、誰もがそうだろう。

「それはそうと自己紹介しよう、な？」

セルはさっきの少し思い空気を跳ね退けてケロッと言う。

「そうだな、俺はレックリーツ・ア・レジスト、レックリーツが名前だ。破壊と守護の力を司るエレクスを崇拜してる」

「俺はレイル・克蘭ツェ、知識と薬の神ネストの教徒だが……ハッキリ言って家族がその教徒なだけ」

「私はエレナ・セレーナ・ヴェングリッドですう、音楽の神リリネラスの教徒ですう」

「拙者は将棋しょうぎ 流浪るろう、疾風歪迅雷荒はやてユガミジンライスサムという瞬間を司る神に仕える」
それぞれ自己紹介を終え、そしてココアに移る。

「俺は華香カカオ 恋焦愛だ。ココア 幼い時に無宗教って事で家族全員……。ハッキリ言って宗教に入る事がトラウマだから今後、きつと何処にも入ることは無いだろうな……」

ココアの目は暗い影をしていた。

「ココア……」

セルが呟く、彼は何となく察したのだろう。

「だからこそ俺はここで悲しみを止めるんだ!!」

ココアが言い放つと、その言葉に誰もが微笑んだ。彼は前を向いていると。

夜、とある寝室。ロボットや動物のヌイグルミなどアンマッチな光景だが、それは置こう。

ドアが音を立てて開けられ、現れたのは青いパジャマを着たココアだ。湿った長い髪の毛に付いた水滴をタオルで吸い取る。

ベッドの上に座るとジャラつと鎖の音がした。そこへ目を移すと大切な銀時計だ。小さな溜息を吐いて銀時計を開けると、一枚の500円玉程の大きさのコインが落ちた。

ココアが拾い上げ、模様を見る。そこには秒針、長針、短針の三本の針が彫られた絵にも係わらず時を刻む。

その中で短針が進む周りを3本の矢が円になるよう曲がっているのが特徴だ。数字は無く、ただ針は回り続けている。

ココアは笑みを浮かべて銀時計に戻した。銀時計には数字があり、ちゃんとした時計になるらしい。

「いつか貴女が必要とする騎士に俺はなります」
空に浮かぶココアは目を閉じてそっと呟いた。

No. 005..俺は仲間を信じてる

月星浮かばぬ闇夜の空。多くの建物から漏れる光や街灯がいでうで夜も明るいが、何処にも人がいない事が分かる。

たった一人、買物袋を提さげる一人の青年が自動販売機で飲み物を選んでいた。理科の実験で作る緑のスライムの絵が書かれた飲み物『スライムメロンサイダー』と書かれた物を選んだ。

それをゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……っと、普通の飲み物よりテンポがゆっくりな喉を鳴らす音がした。

「ふはあ………ったく、セラ姉め!! 何で俺が姉さんの為に酔すを7本も買わなきゃなんねえんだよ!! 酔をそのままがぶ飲みつて酒と同じ感覚か!?!」

まるで酔っ払いの親父のように青年は文句を言った。彼はどうやら買い物押し付けられたようだ。ついでに酔は元々は酒の一種である。

「——ん?」

彼は何か嫌な予感がした。

自分の向かう方向はただいままでも続く住宅街。空を見上げると月は見えず、星一つ無い。街路樹にも気配はない。

そして後ろを振り向くと……——ウオオオウウ——と不気味な声。生暖かく、そして冷たい風が彼の頬を撫でた。

「やばいな……。こんな時は——逃げよ!!」

戦う気はゼロのようだ。彼は街の中を駆け抜ける中、『MAL』が脚を補助しているのか強く光っていた。

生暖かい風を身体で切り裂き、闇夜を走る。『MAL』のお陰か息切れは無く、嫌な気配から青年は逃げる。だが、脚に灰色のベルトが絡み付き、彼を投げ飛ばした。

吹っ飛んだ彼は壁に思い切り背をぶつける。肺の中から息が殆ど吐き出され、息が金属の味がした。痛みで目を瞑^{つむ}っていた彼は目を開いた。

彼の目に映ったのはボロボロのメイド服を纏った少女と彼女が底う白い髪の少女……シオンがいた。

場所は広場、戦闘にはうってつけである。シオン達は半径2m程の魔法陣による結界が作られている。

普通のライトノベルなら此处で主人公が助けに行き、女の子と知り合うのが当たり前だがそれどころじゃない。何せ数が尋常じゃない……広場を人型の異形^{いぎよう}が多い尽くしているのだ。

青く半透明で顔は無く、唇の無い口からニヤケタように歯や歯茎が覗く。それがザッとテニスコート一個分の広さにギュウギュウ詰めだ。

閑話休憩

夜、とある寝室。ロボットや動物のヌイグルミなどアンマッチな光景だが、それは置こう。

ドアが音を立てて開けられ、現れたのは青いパジャマを着たココアだ。湿った長い髪の毛に付いた水滴をタオルで吸い取る。

ベッドの上に座るとジャラつと鎖の音がした。そこへ目を移すと大切な銀時計だ。小さな溜息を吐いて銀時計を開けると、一枚の500円玉程の大きさのコインが落ちた。

ココアが拾い上げ、模様を見る。そこには秒針、長針、短針の

三本の針が彫られた絵にも係わらず時を刻む。

その中で短針が進む周りを3本の矢が円になるよう曲がっているのが特徴だ。数字は無く、ただ針は回り続けている。

ココアは笑みを浮かべて銀時計に戻した。銀時計には数字があり、ちゃんとした時計になるらしい。

「いつか貴女が必要とする騎士に俺はなります」
空に浮かぶココアは目を閉じてそっと呟いた。

が、突然、目の裏の前で何かが横切った。すぐさま目を開いて窓から顔を出す。青年が人型の大群の中へ落ちていくのが見えた。

「何が起きたんだ……!?!」

ココアは机の上に置いていた銃弾を握る。すると右手の甲にある『M A L』が光を放ち、銃弾はリボルバーに変わった。

ココアは飛び出るように外へ出ると、大量の異形の光景に顔が引き攣った。

「何だコレは……!?! ツ!」
一部の異系がココアに向かう。

先ほど拳銃に変わった元・銃弾を構える。この拳銃は『U L C A』なのであろう。次々と銃弾によって倒される異形、息絶えると水風船のように弾け、地面に落ちた液体は消え失せた。

一方、黒髪の青年はそれを見てブレスレットを大剣に変えた。これもまた一種の『U L C A』のようだ。

とにかく周囲の敵をその大剣で一掃する。次々と間を詰めてくる敵を次々破壊するが一行に数が減る気配は無い。

その時、魔法陣の結界に入っていたシオンのアホ毛がぴよこんと

立ち上がる。そしてシオンはそれに気付き、魔法の使い過ぎか息切れするメイドに話しかけた。

「ヨモツちゃん！」

「どうなさい……ましたか……お嬢様……？」

「りゅーりゅー、きたよ」

「主様が？　なら……」

メイドが腕を前に構える。彼女の腕がバラバラと分裂し、青年とココアの襟首を引っ張ってシオンと彼女がいる結界に入れられた。というか放り込まれたので、二人とも頭部を打ち付けた。

「「痛！！」」

頭を摩りながらお互いに自分と同じ事を言った相手を見る。

「「ココア！？／セル！？」」

二人は顔を見合わせてこれまた同時に叫んだ。　どうやら知り合いのようだ。

「お前も異変に巻き込まれたのか！？」
セルと呼ばれた青年がココアに言った。

「いや、ただ誰かが吹っ飛んだのを見たから何事かと思って外に出たらこの状況になっただけだ」

「俺に巻き込まれたのか、スマン。　それはそうと……」
そういつてメイドに何故この結界に引き込んだのか聞いた。　しかし見ていれば判ると言った。

突然、デパートの自動ドアが開くように広場の地面が開いて行く。次々と異形が落ちていった。　結界は空中でそのまま停滞をしている。

「何故にその倒し方!？」
二人同時にツッコミを入れた。

「OpenTheDoor」

いつの間にか二人の後ろに立っていたシンが英語を言っている。

「やかましい!! それより俺の愛銃返せ!!」

ココアはコメカミに血管を浮き上げながらシンに言うと「へい」と金色の銃弾を渡した。

「あ、それより試験は？」

「受かったさ、今日から俺は政府の犬『忠誠騎士』だ」
ロイヤルナイツ

「ろいやる……ぜりー？」

「蜂蜜じゃねえよ!!」
ロイヤルナイツ
「『忠誠騎士』だ!! 国からの依頼を受けて傭兵の真似事や、様々な危険物を取り除いたり魔道具の素材集めなどの仕事をするんだっての!!」

「まあ知ってるけど。一応、俺の家……『白黒』と、シオンの家、『日月』は国家契約してるから一応は政府の人だし」

といいながら地面に触れる。地面のドアは自動で閉じ、広場は異形が現れる前の姿に戻った。

「国家契約って貴族かよ!？」

ココアが叫んだ。

「こっかけいやく? きぞく?」

青年の頭には“?”のマークが浮いていた。

「ある一部の世界では広い土地を持つ者……主に貴族とかが自分の持つ土地を政府に譲歩し、その代わり特殊な権力を『MAL』に

宿されるらしいが……どう言った事か知らん」
ココアが説明する。

「その本人である俺とシオンもその権力が何かは知らねえぞ」
「ぷにゃ」

「知らねえのかよ!!」
ココアがずっこけた。

だがその時、地面から灰色の巨大な手が生えてくる。その腕は二階建ての家程の高さまで延びると、その上に誰かが音も無く着地した。

「こんばんは、良い夜だね？」

それは奇妙な男だった。シルクハットに片眼鏡^{モノクル}、黒いスーツが特徴的だ。ついでに空は曇っている。

「どこが？」

「小生はこの天氣が好きさ、月が隠されし夜がね？ さて、小生の宴はどうだったかい？」

シルクハットの男が手に持った杖をクルクルと回しながら言う。

「なあヨモツ、今思ったんだけど何でこんな事になってんだ？」

俺は魔力が集まってるのが気になったから来たんだけど」

「私とお嬢様はただ、ご主人様が夜食が欲しいと申されたので買い物に行った所、水色の魔物に襲われました」

少し苛立った感じでメイドが言う。

「十の瞳が揃いし時、プラスの眼、マイナスの眼を持つ神現れし時、世界の源を司る神、現れるであろう……。」

小生らの仲間未来予測をする事ができるものがそうだったのさ。

だがね？　これは本来はとある世界にある伝説の一部には巨大な神からプラスの眼、マイナスの眼を持つ神が生まれ、その二体からそれぞれ善と悪の神が5体ずつ生まれた伝説に似ている。

つまりは、この世に巨大な神が復活する事を表しているのだよ！」

男は興奮した感じで言った。

「つまりはその復活を？」

ココアが聞く。

「イグザクトリー。その通りですよ」

そう言ってシルクハットを取り、お辞儀をする。　白い手袋には模様があり、そこには血の涙を流した瞳の絵が描かれている。

「『謎の瞳』^{エニグマアイズ}のマーク！？」

ココアが叫んだ。

「御明答。　という事は『天地神明総合政府』^{てんちしんめいそうごうせいふ}と呼ばれる組織の人間らしいですね？」

クルクルとシルクハットを回して笑みを浮かべている。

「お前のせいでこちら政府に入るときの試験に困ったんだが？」

「さあ？　　そういえば第六番が君達の手の刺青、^{タトゥー}『MAL』って

言ったね？　それを改造している人を操る事に成功したらしいよ？

多分、君の試験に現れた人だろうね……？　　そうそう、君達の『MAL』、少し改造されてるだけで簡単に操ることができるから気をつけたほうが良い」

男がシルクハットをピタリと止める。

「っていうか『MAL』を改造するのは違法行為と同じだから捕

まるんだけど？」

シンがまるで麻薬は所持しているだけで重罪と言っているように言った。

「ねえココアちゃん、そのひとはどうなったの？」

「まずは特殊眼の支配を完全に解いてから逮捕だ。『MAL』は改造したら法律を破ったとされ、自動的に防御プログラムが殆ど外れる。

だからこそ、その眼の力を受けたんだろう」

シオンの問いにココアが答えた。

「ま、そのようだね……で、それより宴を終えようか？ 小生としては特殊眼を持っていないのに力の底が見えない“神”と本気で戦うのは嫌だからね？」

そういつてシルクハットの中から一つのダイスを取り出した。

「「神い！？ 誰が……！？」」

ココアと青年が眼を見開いて驚く。

「俺が」

シンがのほほんと言った。

「リュウが……？」

ココアが言葉をぽつりと呟いた。

「それより良いかい？ ここで君が手を出すなら」

「いやメンドクサイし、最低でもシオンに手を出さないなら御勝手？」

シルクハットの男が問いを言い切る前にシンは返答した。

「――君は仲間については考えないのか……?」

「信じてるから」

「?」

「俺は仲間を信じてる。 例え生きるか死ぬかの戦いも俺の仲間は乗り越えられるって俺には“わかる”よ。」

だから俺は唯一、みんなで守んなきゃいけないシオンだけを守るんだ」

「――面白い……、君は面白い子だ!!」

「小等部の時に校庭いっぱい魔法陣を書いて、巨人を召喚してドジョウ掬いを躍らせた時にも言われたけど?」

「いや、君は学校で何をしているんだい?」

「面白可笑しく生きてる」

シンのその言葉にシルクハットの男は額に手を当てる。 頭が痛くなってきたようだ。

「まあ良い、君は少々不思議だ。 小生自身からは直接手を出さない。 つまりは君の敵ではあるから邪魔はするが、小生自身は全くと言って手を出さない」

「言葉遊び?」

「真面目に話しているんだが!?! 遊び……? そうか、ならゲームにしよう。 少年、我々『エンクマファイズ謎の眼』は伝説を蘇らせる為に様々な復活の道具を集めている。」

巨大なエネルギーの塊である世界源や、希少種である魔物など。セカイゲンそれらを集める事を阻止してみよ?」

男がシンに提案する。 が、そこにココアが入る。

「阻止って……お前達の復活の邪魔になるんだろ? だったらどう考えても罠としか思えないが?」

「ああ、確かにそうだがこちらにも考えがある。 復活させずとも根本的な目的の達成はできるからな」

「感だけど、俺達にはかなり良い方向で、何か問題あるとしたらリオだけが被りそうだな……まあ良いや、じゃあそのルールで」

完全に感だけで話を進めるシンはココアが未来予知かよと言ってるのも無視で了解した。 ついでにリオは噂をされたせいか家でクシャミをし、上からシャンデリアが降って来るといふ不幸に遇っていた。

No. 006..待合場所

『少年、我々『謎の眼』エニグマアイズは伝説を蘇らせる為に様々な復活の道具を集めている。

巨大なエネルギーの塊である世界源や、希少種である魔物など。セカイゲン
それらを集める事を阻止してみよ?』

男がシンに提案する。 が、そこにココアが入る。

『阻止って……お前達の復活の邪魔になるんだろ? だったらどう考えても罠としか思えないが?』

『ああ、確かにそうだがこちらにも考えがある。 復活させずとも根本的な目的の達成はできるからな』

『感だけど、俺達にはかなり良い方向で、何か問題あるとしたらリオだけが被りそうだな……まあ良いや、じゃあそのルールで』

「っと言う事が昨日あったんだ。 って事でがんばれよ、リオ?」

「俺がやるのかよ!? お前……マジで怒るぞ?」

「怒ってみやがれ、頭は良いけど馬鹿!!」

「矛盾してるし!?!」

と言いながら先ほどから食べていた缶詰をシンに投げ付け、スコ
ーンと良い音がした。

「じゃあ馬鹿!!うまし!!」

「読み方変えたただけだろ!?!」

「ウーウーウーウマウマ」

「何故に!?! そして鹿はどこ行った!?!」

「ねえにいにい、いま食べてるかんづめってなあに?」

「鹿の缶詰……って鹿あああああ!?!」

シオンの言葉がトドメを刺した。

「で、話を元に戻そう。お前は何がしたいんだ？」
リオが鹿の事は置き、話を戻した。

「ん〜……ただのゲーム？」 「ゲーム？」

「オイ！！ どう考えてもそれをただのゲーム扱いって危険過ぎるだろ！！」

「大丈夫だよ、あいつ自身は何もしない。それに戦うのは約束してない他のメンバーだから」 「ね？」

「それよりどうやって阻止しろってんだよ？」
リオが1番の問題点を指摘する。

「あ……」 「にゃ……」

「お前の事だから分かった……やっぱり考えてないのかよ!？」
『ppp、ppp』

シンの『MAL』から鳴り響く。

「しもしも？」

シンは左手の親指を耳に当て、小指を口元に持って行った。

『もしもし……だろ？ ココアだ。俺とセル……あの黒髪ボサボサ頭の奴が神の事を知ったから、政府に神の事は教えてもらった。そんで上司に『謎の眼』どもの事じゃないが、とある仕事がありユウ、それとシオンに来たぞ？ 俺もそれには参加する』

「仕事？ シオンにも関係あるならTV念話にするぞ」

『ああ、わかった』

シンは左手を外し、壁にポスターのように張つてあるTVに触れた。画面にはココアが映っている。

「よしオッケーだ」

『了解、こっちも見える』

「で、仕事の場所は？」

『確か禁止区域『白詰野原』シロツメノハラって場所だったな……？』

「『白詰野原』シロツメノハラ あ！？」

シンが声を上げた。

『ど、どうした！？』

ココアが驚くが、それに答えるのはシオンだった。

「りゅーりゅーがうまれたばしょだ！！」

「シオンの言う通り、俺の生まれ故郷で2歳まではその世界に住んだ」

『オイオイ……『白詰野原』シロツメノハラは私有地っていうか私有世界だろ！
確か古の神が作り出した遺跡などの遺産があつて……。

——つてお前が神だったか……。まあそうでもなきゃそんな所で生まれる訳も住んでるわけも無いしな……。

ん？ 生まれたって事はリュウ、お前って台風みたく条件が揃う事で生まれた神なのか？』

「俺は両親がいるぞ、俺から約千代くらい前は発生したかもしれんけど」

『千代って……どんだけ凄い神だよ！！』

ココアがツツコミ、その時にシンからリオに代わった。

「もしもし？ 俺はシオンの兄弟の理雄兎ってんだが？」

『シオンの兄弟……（似てない……が、かなりの美女だな）えっ
と理雄兎さんですか』

「リオで良い。お前とは同じ歳だ」

『え？ ——そういえば始業式に居た気が……』

「そんな事より『白詰野原』シロツメノハラで仕事ってのは？」

『その世界にある四つ葉のクローバーには運を上げる魔力がかかっているらしい。その研究の為、欲しいらしいんだが……。

というかまず最初に『シロツメノハラ白詰野原』の持ち主に許可を模らわなきやいけないんだったな……」

ココアが無理だよな……なんて呟く時、シンに代わった。

「別に良いけど？ それにその研究してるのが誰だか分かってるし」

「というかカカオ華香、『シロツメノハラ白詰野原』はシンの物だからこそそいつがシンを入れるように言ったんだと思うが……？」

リオが感の良い人ならすぐ気付く事を言った。

『あ……』

「探偵にはなれないな」

「いやなる必要無いだろ……！？」

自分がすっぱ抜けていた事に何も言い返せないココアの代わりに
リオが突っ込む。

閑話休憩

一面芝生の原っぱ。 空は明るくも沢山の星がいくつも見え、しかもかなり近いか大きいかわからないが、どの星も直に見て月同様に丸く見える。

「次元最大の巨大世界……『ディメンションDポータル』……。 多くの魔法科学や何から何までを集結させた場所で、『天地神明総合政府』の本部に行ける唯一の世界……」

ココアが啞然とした口調で原っぱに立ち、そう呟いた。

星に機械のような物が見えることから魔法の世界、しかも高次元の文化を集結させたので完全に万有引力は無視しているのだろう。そんな空を見上げていたココアを、すっ飛ばす勢いでシンが飛び付いた。背中にはシオンが乗っている。

「ぬいっす！」

「ぷにゃっす！！」

「――うをおおう……重いっ！！」

シン+シオンの体重をギリギリで支えるココアは死にかけである。

「――てめえら、^{カカオ}華香が死ぬぞ……？」

二人が現れた場所からリオが現れる。だがそんなリオもボロボロであった。

「ってアンタも何があったんだよ！？　そしてお前ら、とつとと退け？」

「へーい」

「ぷにゃ」

「――ボロボロな件は……無言を貫かせてくれ……ごふっ」

※リオの冒険はここで終わってしまった。※

「リオおおおおお！？」

ココアの叫びは虚しく星空の空に響くのだった。

「さてシオン、二人を置いて行うよ」

「わたっか」

「「ちよっと待てえ！！」」

二人のツツコミなどお構い無しにシンとシオンは魔法陣に乗って移転した。

受付の広間に来た4人の中ですぐにリオが「じゃあ俺は出航届けを出しておくから」とカウンターに向かっていった。

「ぷにゃ……？　なんでしゅっこうとどけがあるの？」

「『シロツメノハラ白詰野原』は神格クラスの魔物が現れやすいらしい。もしも何かあった時に『MAL』だけじゃ対処できなかつたら危険だからな」

とココアが説明する中、シンは聞いているのか聞いていないのかゲームをやって楽しんでいた。

そこによろよろと物を運ぶ黒髪の青年……。

「あ、セル。　どうしたんだよ？」

ココアが引き止めた。

「何って、依頼で物運びだ。『イデアニウム』つつうエントロピーだか何だかを吸収すればするほど硬くなるとか言う最強の魔法金属だ。

例えばその金属を落とした時、その金属が地面にぶつかって響くはずの筈のエネルギーが吸収され、バウンドをしないでその金属にその分のエネルギーを吸収するらしい。

そんな物体ははつきりいって加工なんて無理だ。　ダイヤモンドみたいに同じ物質同士を擦り合わせるなんて事をしててもエネルギーだけ吸収する。

けどそれを加工する為の特殊なスキルを持っている人が本当に稀にだが存在して、その人に今から渡しに行くんだ」

と説明する彼の言葉にシンとシオンは完全にちんぷんかんぷんだった。

「それはそうとセル、こいつらに自己紹介まだだったよな？」
ココアはふと思いつくとそういった。

「あ……そういえばそうだったな。俺は日照^{ニッショウ} 世流牙^{セルガ}、世界の流れの牙って意味。普通に呼ぶときはセルで良いよ。

ココアにはまだ言っていなかったけど俺の親父は人間から神になった成神で、俺自身はその血の上に更に成神だ」

「は！？ お前、驚いてなかったか！？」

「いや、俺の知ってる神で高位の神がそんな普通にいるとは思わなくてだな……って……」

ココアと話していた彼がシンとシオンに顔を向けると二人は寝ていた。

「寝るな！！」

「――金属やら神やら……もう面倒臭い。それにセルガだっけ？ セルで良いだろう？」

「適当！？ つつかさつきセルで良いって言ったのそれ聞いてなかったのかよ……」

「――くきゅー……zzz」

「ってか白いのは完全に寝てるし！？」

セルもツツコミ慣れているようだ。

「で、俺は白黒^{びやくくろ} 龍神^{りゅうしん}」

「ぼくはひづき しをん」

そういつて二人は「よろしく」と言いながら、セルの後ろに握手を求めた。

「「いや何処に握手を求めてんだよ！？」」
ココアとセルは同時にツツコミを入れた。

「え？　どこってセルに」

「いないから！！　俺の後ろには誰もいませんから！！　例えば居たとしても背後霊かヤンデレだからな！？　もしかしてお前らって見えちゃう人！？」

セルは顔を青くしてつつこんだ。

「おんなのコとなかよくなるとえっちなイミでイチャイチャして、まちがったセンタクをすると、うしろからさされるゲーム？　つうしょうエロゲ？

それよりかおだちはイイけど、むしろヨすぎておんなのコにモテナさそうなココアちゃんにしつれいだよ？」

「シオン……お前が俺に失礼すぎるだろ！？　って言うか何でエロゲがどう言うものか知ってんだよ！？」

「しょうとうぶ（小等部）になるまえ、もじがよめるようになったからいろんなゲームとくいだからエロゲもやってみたの」

「けど確かにヤンデレって大体そっちが多いよな？　普通のギャルゲでもグロが中心じゃなきゃそうそう無いし」

トンデモ発言をするシオン、そしてそんな彼女を何とも思っていないどころか同意するシンの姿にココアは啞然とした。

「その見た目でエロゲやってるって……お前ら二人を純白だと思ってた俺を処刑したい！！」

「けどだからと言って他人が性交してようが性的描写だろうが『それがナニ？』って感じ。　俺にはまだ、性欲は無えと思う」
「ぼくも」

そんな二人にココアとセルは気付いた。　この二人には性欲とはただの本能としてしか存在してないのだろうと。

数分後、手続きが終わったりオは何故か真っ白になっているココ

アにどうしたのか理由を聞くと、真の純白とはシンとシオンのような二人だと。

リオはそう悟りを開いて、真理を見たと言うココアに「お前もかブルータス……」とシーザーと同じ言葉を呟いた。

第4話…この世界で必需品（前書き）

メールボックスでとある方にリメイクではないけど編集して欲しいとの事があったので近々編集します。

あとお気に入り登録数が15あったのに……いつの間にか9になってました……。 悲しいです。

第4話…この世界で必需品

街中でピコピコとアホ毛、それは純白な髪の毛だった。その髪の毛の持ち主であるシオンは楽しそうにロボット物のプラモデルを造っている。

ロボット物のプラモデルを女の子が作っていると場違いに見える。しかも倒れたリオ（頭部には3段重ねのこぶができている）を椅子にして作っているのかかなりシュールな光景である。シンはそんなリオの顔に×を大きく落書きしていた。

ふとシンは手の甲を見る。五角形からラインが指の第二間接まで伸びている。（親指だけは第一間接までだ。）てのひら 掌には円に上下左右にTの字がくっついた模様だ。

この少々時間を遡り昨日、ロコと別れて新しい家に着いた時の事だ。5階建ての家に3人とヴァイルは来ていた。

「ここが……新しい家か？」

「りゅーりゅーとおうちいっしょなの？」

「俺に聞くな……俺は道しか知らされてねえ……」

シン、シオン、リオの順に言葉が紡がれる。

『これは移転用の建物、『ポータルハウス移転倉』って奴だ』

「それだけじゃない。普通に寝泊まりや、花火などがあれば屋上で見ることができるぞ」

家から片目は白い眼帯で隠し、切り揃えられた短髪が和風の印象を感じさせる……セーラー服の少女が現れる。130程の低身長や顔付きから歳は十代前半ぐらいである。

「あ、母さん」「りゅーりゅーのママだ」

見た目に反してシンの母親らしい。

「案外遅かったな4人とも。ヴァイルー――覇神ハルカが手伝って欲しい所があると呼んでいた」

『ああ、了解だ』

そういつてヴァイルは家に入って行った。

「シンのお袋さん、これってどういうことだ？」

「移転能力を付加できるのになぜ俺達が家も変える必要がある？」

「「あ……」」

白黒ビャクコク 龍神リゅうしんの母親はかなり男っぽい口調だが、男っぽい少女と思われやすいリオとは違い、決定的に女性だと分かる理由は胸がCカップはあることである。

「それに荷物も何一つ持っていないだろう？ ついでに中の移転装置に繋がってるのは俺達が住んでる神界シンカイだからな」

神界とは神々が住む世界であり、一部の宗教では聖域として例え邪神が許されても、人間は入ってはいけない世界と言われる程だ。

「そういうことだったんだ」「だったんだ」

「全く考えてなかった……」

「まったく……おっとそれは置いてお前達、利き手を出せ？ この世界の生活必需品がある。って言ってもお前達は両利きだったな。理雄りおと兎は器用貧乏りおとって事だが……はあ、リュウとシオン、左右ぐらい覚えろ」

そういつてシンの母は黒い一円玉サイズの物が入った入れ物を取り出す。

3人の左手にそれを張り付けた。それは手の中に入り込み、今日のシンの手にあった模様が現れる。

五角形からラインが指の第二間接まで伸び、親指だけは第一間接まで伸びている。掌^{てのひら}は円に上下左右にTの字がくつついた模様だ。

「身分証明書であり財布や鍵^{カギ}など、様々な事をするのに必要な物
マスターオールライセンス
『全主権身分証明書、略して『MAL』だ』

「めいる……」

シンの手の甲の『MAL』は白く光っていた。

その昨日の事を思い出していると朝早くからテンションの高い声が響く。

「お待たせ〜♪ 待った？ ってリオにゃん死んでる……」
水色のTシャツに白い短パンを穿いたロコが口からナマズのような魂が出てるリオを発見した。顔は落書きで大変な事になっている。
る。

「いつもの事だ」「よ」

シンが胸を張って堂々と叫び、シオンはそれを後付けした。

「いつもの事なんだ……」

ロコが唾然とするのであった。

「リオだからな」

「にいだからね」

『ひでえ……ってか『リオにゃん』って……止めてくれ』

口から出ていたリオのゴーストラしきナマズが呟いた。

「可愛いからリオにゃんだよ!! ——あれ？ ヴァイルさんは？」
「川に洗濯に行ってる」「いってる」

シンが適当な事をいい、シオンが後続く。

「昔話か！？　で、俺達はどこに行く予定なんだ？」

口の中にナマズ……いや、魂を押し込んだリオが手刀でシンに突っ込み、本題に入る。

「最初は駄菓子屋さんに行こう」

「なぜ駄菓子屋なんだ？」

「『ULCA』だよ」

ロコはそういつて歩き出した。　3人は彼女に付いて行く。

「あるか？」　「ないか？」　「いるか？」

リオ、シン、シオンがそれぞれ発言する。

「『ULCA』神秘《Unknown》、荷重《Load》、変換《Convert》、機器《Automatic》の略だよ」

「神秘エネルギーをロードして変換する機器……魔導機器は魔力だけだが、数多のエネルギーを変換する事ができるのか。」

「……って何でそんな物が駄菓子屋に売ってんだよ！！」

「リオにゃん……この世界ではスポーツとか、モンスターが現れた時の為に使われるよ？　スポーツで闘うときはアルカデュエルって呼ばれてる。」

駄菓子屋に売ってる『ULCA』でも大体は怪我もしないし、痛みとかだって押さえられるもん。　この先進世界では主に『ULCA』がこの世界では中心に使われるよ」

「何で駄菓子屋に売ってるんだ？」

「大体の『ULCA』はランクって物があって、それぞれ免許がなきゃ使用できない仕組みになってるんだよ。」

免許の必要が無い『ULCA』は駄菓子屋や文房具屋とかに売ってる。　免許は満6歳からだって言ってたからもう取れるはずだよ」

「免許……？」

シンがロコに聞いた。

「使用してもいいっていう許可、『ULCA』にはそれぞれ鍵^{カギ}がインストールされてるから『MAL』の情報を読み取るんだよ」

「様々な神秘エネルギーで動かす機器『ULCA』に、全ての個人情報などを体に埋め込む技術『MAL』か……凄い技術だ」

「――よし、なにが何だか分かんなかったけど駄菓子屋に行こう！」「いこー！」

「わからないのかよ！？」

「まあまあリオにゃん……僕だって説明されたのをそのまま言うただけに近いから」

「そうなんだ……」

「じゃ、そういうわけで駄菓子屋にレッツゴー！」「ゴー！」

シンの空に挙げた拳、その手の甲にある『MAL』は白い強い光を放つのだった。

ただ今更新中

ただ今、大編集を行なっております。

多くの読者様に楽しんでもらえるようにもっと上手く

前回に書きました「メールボックスとある方にリメイクではないけど編集して欲しいとの事があったので近々編集します。」との事で、3週間ほど掛かりますが誠心誠意頑張りますのでどうか応援よろしくお願いします！！

Handwriting practice lines consisting of 10 rows of wavy lines for tracing or writing practice.

キャラの設定もちゃんと固定させるように編集しております

キャラの設定もちゃんと固定しています。

この話ではわかりませんが、実はあのキャラの空白の時代は…
…何て驚きをさせたい事もあります。

他にも「え!？」 このキャラって○○だったなんて!？」なども
考えて今まで投稿した中にも伏線は沢山あります。

白黒家ビヤクコクと日月家ヒツキはいつからの付き合いだったか。

白黒家の初代先祖はどのように発生したのか、日月家もまた…
どんな神だったのか。

ストーリー内のコメディでは何故かエロく感じないエロチックな
シーンや、リオがイヤァンなシーンになっているのにも関わらず
どんな変態ですら「あ、リオだけは見た目は良くて精神的に受け
付けない」なストーリーが…。

はたまたシンとシオンのラヴラヴ過ぎて「このリア充…和むじ
やねえか…」なシーンや、シンとシオンがリオの目覚まし代わり
に爆弾を設置して「リア充ども爆破させるな!!」などのシーンも
書きたいです。

最後に一言。

シン「俺の名前は白黒リュウシン 龍神!! 好きなチョコレートは主にマ
シユマロの中にチョコを注入された奴だ!! 特技は体育座り!!」

リオ「突然の自己紹介！？ しかも好きな食べ物じゃなくて好きな食べ物の種類を答えやがったコイツ！？ そして特技が体育座りってオイ！！」

シオン「ぷにゃ！！」

リオ「いや何が言いたいんだよ！！」

リオ、うるさい。 お前も最後に一言。

リオ「理不尽だあああああ！！！！」

ただ今の現状、任務達成確立40%

うーん、今週中に完成するだろうか……いや、後は大きな編集だけだから大丈夫かな？

がんばってみます。

アビゲキヤラをもっと知っていたくにはまず自分が約束を守るんだ！！　なのです。

そういえば新キヤラがかなり増えたなあ……今までリオのための女の子キヤラが多かったけど共に戦う仲間キヤラでかなり男キヤラが増えてきたな……大体はかなりの脇役だけど。

リオ「やれないじゃない、やるんだ！！」

しをん「かっこいいーセリフいつでもにいにいじゃムリだね」

シン「だってリオだもんな」

リオ「うるせえ！！」

後は前の奴を差し込めるようにするだけだ

編集……が、終わらなかった。すみません、ですが後は今までに書き上げた物を少し書き換えるのと、それを差し込めるようにする話だけになりますので直ぐに完成いたします。

せっかく多くの方々が読んでくださっているのですから、自分はそのに答える為に夜更しと電車の中、授業中にこっそりと進めて行くので応援よろしくお願いします!!

そうそう、それと新キャラであるココア、あれは主人公じゃないですよ……? 彼の挿絵も友達がなんと書いてくださっているのはいずれ入れさせて貰おうと思います!!

(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)

[illegible]

不甲斐ない私で申し訳ございません。

さてさて、本編はどのようなモノになるか……お待ち置いてください!!

$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$
$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$
$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$	$(\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ 3 & 0 \end{smallmatrix})$

(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)

(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)
(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)	(O 30)

(O 30) (O 30) (O 30) (O 30)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5904u/>

AbilityGame

2011年11月21日17時06分発行